

仙台市文化財調査報告書第328集

宮城県仙台市

仙台平野の遺跡群XVIII

—— 平成19年度発掘調査概報 ——
陸奥国分寺跡第28次調査ほか

2008.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第328集

宮城県仙台市

仙台平野の遺跡群XVIII

—— 平成19年度発掘調査概報 ——
陸奥国分寺跡第28次調査ほか

2008.3

仙台市教育委員会



陸奥国分寺跡 4区 SF49築地塀跡



陸奥国分寺跡 5区 SF49築地塀掘込地業跡断面

序 文

陸奥国分寺跡は最北の地の国分寺として知られ、大正11年（1922）に国史跡に指定されています。昭和30～34年の学術調査によって、主要伽藍が解明されましたが、その後も整備のための調査を断続的ではありますが続けてきました。平成18年度からは史跡公園として整備するため、継続的に発掘調査を実施していくこととなりました。今年度は第2年次にあたりますが、昨年度に引き続いて伽藍地南辺と寺地の北東部において調査を実施しました。

南辺築地塀については西部や東部の数地点で残存状況を確認し、正確な位置を求めることができました。また、南大門跡と築地塀との関係も明確となりました。北部の調査では初めて掘立柱建物跡を発見しました。昨年度は竪穴住居跡を発見していることから、寺の内部における機能の違いを解明していく手がかりを得たと考えております。

現在は歴史公園としての整備が待ち望まれており、今後の調査成果もおおいに期待されるようになっております。

本書はこの陸奥国分寺跡の範囲確認調査の他に、「仙台平野の遺跡群」に対応した調査として、個人住宅建設に伴う砂押古墳の発掘調査成果の概要をまとめたものです。砂押古墳の調査では箱式石棺と礫槨の2種類の埋葬施設が良好な状態で残存していることを確認し、大きな成果を挙げることができました。

平成20年3月

仙台市教育委員会
教育長 荒 井 崇

例 言

1. 本書は国庫補助事業による、仙台平野の遺跡群に係わる平成19年度範囲確認調査の概報である。
本書の内容は既に公開されている現地説明会資料や各種の発表会資料に優先する。
2. 本概報は調査速報を目的としている。執筆は第1・2・4章を平間亮輔、第3章を長島榮一が行ない、編集は平間亮輔が行なった。遺物観察表・遺構註記表作成、遺物写真撮影は齋藤義彦が担当した。
3. 本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 陸奥国分寺跡の平面図に示した座標系は、平面直角座標系X（旧測地系）である。
2. 文中および図中の方位は真北を基準としている。
3. 遺構の略称は次のとおりである。陸奥国分寺跡の遺構番号は平成18年度に付けた番号の続きとし、今後は継続した通し番号を付けることとした。
SA：柱列などの堀跡　SB：建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SF：築地跡　SI：竪穴住居跡
SK：土坑　SX：その他の遺構　P：ピット、小柱穴
4. 遺物の略号は次のとおりで、陸奥国分寺跡の登録番号は各調査回数における番号である。
A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ調整）　D：土師器（ロクロ調整）
E：須恵器　F：丸瓦・軒丸瓦　G：平瓦・軒平瓦　H：その他の瓦
Ia：土師質土器　Ib：瓦質土器　Ic：陶器　J：磁器　K：石器・石製品　L：木製品
Na：鉄製品　Nb：非鉄金属製品　P：土製品
5. 土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原1997）を使用した。
6. 遺物実測図の網点は黒色処理を示している。
7. 表中の（ ）が付いた数字は図上復元した推定値である。
8. 第1図 遺跡位置図は、国土地理院、平成17年12月1日発行の数値地図25000「仙台」を使用した。

目 次

第1章 はじめに

I. 仙台平野の遺跡群の調査体制	1
II. 仙台平野の遺跡群の調査計画と実績	1
1. 調査計画	1
2. 調査実績	2

第2章 陸奥国分寺跡 第28次調査

I. 調査の経過と方法	2
II. 1区の調査	6
III. 2区の調査	6
IV. 3区の調査	8
V. 4区の調査	9
VI. 5区の調査	13
VII. 6区の調査	19
VIII. 7区の調査	29

第3章 砂押古墳

第4章 総括

挿 図 目 次

陸奥国分寺跡

第1図 遺跡位置図	3
第2図 陸奥国分寺跡全体図	5
第3図 1区平面図	6
第4図 2区平面図、東壁断面図	7
第5図 2区出土遺物	8
第6図 3区平面図、SF45・SD1断面図	9
第7図 4区、昭和58年度調査区平面図	11
第8図 4区西壁・東壁・SF49断面図	12
第9図 4区出土遺物(1)	13
第10図 4区出土遺物(2)	14
第11図 5区平面図	15
第12図 5区西壁、SF49、SK52、SB51断面図	16
第13図 5区出土遺物(1)	18
第14図 5区出土遺物(2)	19
第15図 拡張区北壁断面図	20

第16図 6区平面図	21・22
第17図 SI60・61平面・断面図	23
第18図 6区東壁断面図(1)	24
第19図 SI66平面・断面図	24
第20図 6区東壁断面図(2)	25
第21図 SK58・59・63、SX67断面図	25
第22図 SB57平面図	26
第23図 SB57断面図	27
第24図 6区出土遺物	28
第25図 7区平面図	29
第26図 7区西壁、SK70・72断面図	30
第27図 7区出土遺物	30
砂押古墳	
第28図 砂押古墳位置図	43
第29図 砂押古墳平面図	45
総 括	
第30図 南大門跡、南辺築地塀・溝跡平面図	49

挿表目次

陸奥国分寺跡	
表1	19年度仙台平野の遺跡群発掘調査計画……………2
表2	19年度仙台平野の遺跡群発掘調査実績……………2
表3	陸奥国分寺跡調査一覧……………4
表4	2区遺物集計表……………8
表5	3区遺物集計表……………9
表6	4区遺物集計表……………11
表7	5区遺物集計表……………18
表8	6区遺物集計表……………28
表9	7区遺物集計表……………31

写真図版目次

陸奥国分寺跡	
写真図版1	2・3区……………32
写真図版2	4区……………33
写真図版3	5区(1)……………34
写真図版4	5区(2)……………35
写真図版5	6区(1)……………36
写真図版6	6区(2)……………37
写真図版7	6区(3)……………38
写真図版8	6区(4)、7区……………39
写真図版9	2・4区出土遺物……………40
写真図版10	5区出土遺物……………41
写真図版11	6・7区出土遺物……………42
砂押古墳	
写真図版12	砂押古墳……………46

第1章 はじめに

I. 仙台平野の遺跡群の調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当

文化財課 課長 田中則和

整備活用係 係長 吉岡恭平、主査 高橋敏明、主任 平間亮輔、主事 宮田晋、文化財教諭 齋藤義彦

調査係 主任 長島榮一、文化財教諭 藤田雄介

調査担当職員

陸奥国分寺跡 整備活用係 主任 平間亮輔、文化財教諭 齋藤義彦

砂押古墳 調査係 主任 長島榮一、文化財教諭 藤田雄介

発掘調査、整理作業を適正に実施するため、「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」による指導・助言を受けた。

委員長 工藤 雅樹（福島大学名誉教授 考古学）

副委員長 今泉 隆雄（東北大学大学院教授 古代史）

委員 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授 考古学）

桑原 滋郎（多賀城市文化財保護委員会会長 考古学）

進藤 秋輝（東北歴史博物館館長 考古学）

須藤 隆（東北大学名誉教授 考古学）

宮本長二郎（別府大学非常勤客員教授 建築学）

渡部 育子（秋田大学教授 古代史）

発掘調査にあたり次の方からご協力をいただいた。

（地権者） 中村 望

II. 仙台平野の遺跡群の調査計画と実績

1. 調査計画

陸奥国分寺跡の調査計画については平成19年2月8日に開催された郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会において審議がなされ、了承されたものである。

陸奥国分寺跡の公有化はかなり進展し、これまで未調査部分が多かった主要伽藍以北についても広い面積の発掘調査が可能な状況となってきている。史跡全体の整備に向けて次なる展開を行うべき段階に至ったと判断される。整備に当たっては、寺院の全体像の把握と、遺構の残存状況を確認することが必要である。そのためには大部分が未調査となっている北半部の発掘調査と昭和30年代の調査をはじめとする過去の成果を補足するための再発掘調査を実施し、その成果を基に整備計画を策定することとした。調査は平成18年度から開始しているため、今年度はその2年次にあたる。

これらは国庫補助事業である『市内遺跡発掘調査』で実施するものであるが、この中には個人住宅建設に伴う発掘調査も含まれており、これらは「仙台平野の遺跡群」として包括されるものである。

郡山遺跡ほかの発掘調査総経費は13,690,000円、国庫補助金額6,845,000円の予算で計画したが、これを郡山遺跡発

掘調査に2,906,000円、陸奥国分寺跡発掘調査に6,760,000円、個人住宅対応としたその他の仙台平野の遺跡群に4,024,000円として配分した。これによって、以下のような発掘調査実施計画を立案した。

遺跡名・調査回数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
陸奥国分寺跡第28次	伽藍地南辺西部、伽藍地南辺東部、寺地北東部	670㎡	5月～8月	範囲確認

表1 19年度仙台平野の遺跡群発掘調査計画

2. 調査実績

上記の発掘調査とは別に、個人住宅建設等に伴う砂押古墳の調査を実施しているので、この陸奥国分寺跡と砂押古墳の調査結果を本書として刊行することとした。なお、郡山遺跡については範囲確認調査1件と、仙台平野の遺跡群として対応した個人住宅建設等に伴う調査6件を実施したが、これらはすべて『仙台市文化財調査報告書第327集 郡山遺跡28』として刊行することとした。

調査回数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
陸奥国分寺跡第28次	伽藍地南辺西部、伽藍地南辺東部、寺地北東部	702㎡	5月8日～8月9日	範囲確認	仙台平野の遺跡群
砂押古墳	墳丘部	200㎡	7月9日～8月10日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群

表2 19年度仙台平野の遺跡群発掘調査実績（本書に係わる調査）

第2章 陸奥国分寺跡 第28次調査

I. 調査の経過と方法

1. 調査経過

陸奥国分寺跡は若林区木ノ下に所在する。大正11年（1922）に国史跡となり、昭和30年から34年にかけて実施された学術調査により主要伽藍の概要が明らかとされている。その後昭和47年からは史跡公園として整備するため継続的に調査が行われてきたが、昨年度からは新たに継続的な調査が再開されている。

なお、約50年間にわたって複数地点で実施された調査地点を整理するため、昭和30年の学術調査に遡って調査回数を付けることとした（表3、第2図）。今年度の調査は第28次にあたり、昨年度に続いて伽藍地南辺と北部の状況を明らかにすることを主要な目的とした。

調査は北部から開始した。5月8日に重機によって6・7区の表土除去を開始し、翌日から精査を開始した。6区では掘立柱建物跡が確認され、精査が進んだ段階で調査区を拡張する必要性が認められた。5月29～31日には伽藍地南辺の1～5区の表土除去作業と6区北半部と7区の埋め戻しを行い、その後6区南半部を拡張した。その後は各区を併行して精査を進め、南辺西部の3区の調査を終了して東部の4区に移動したのは6月20日である。7月17日に「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」による現地指導を受け、7月26日に報道発表、7月28日（土）に現地説明会を実施し、8月7日にはすべての調査を終了した。残った調査区の埋め戻しと整地作業は8月7～9日に行った。なお、4区と5区の築地塀跡上面は山砂で覆い、6区のSB57の半裁した柱穴には土嚢袋を入れて保護した。

各区の調査面積と調査日程は以下のとおりである。

1区 84㎡ 5月29日～6月11日、2区 50㎡ 5月29日～6月18日、3区 50㎡ 5月29日～6月20日
 4区 50㎡ 5月30日～8月3日、5区 200㎡ 5月30日～8月7日、6区 168㎡ 5月8日～8月2日
 7区 100㎡ 5月8日～5月22日

2. 調査方法

(1) 調査方法

伽藍地の南辺西部に1～3区、南辺東部に4・5区、寺地北東部に6・7区を設定して調査を開始した。このうち1区は予定よりやや縮小し、6区は調査中に拡張した。

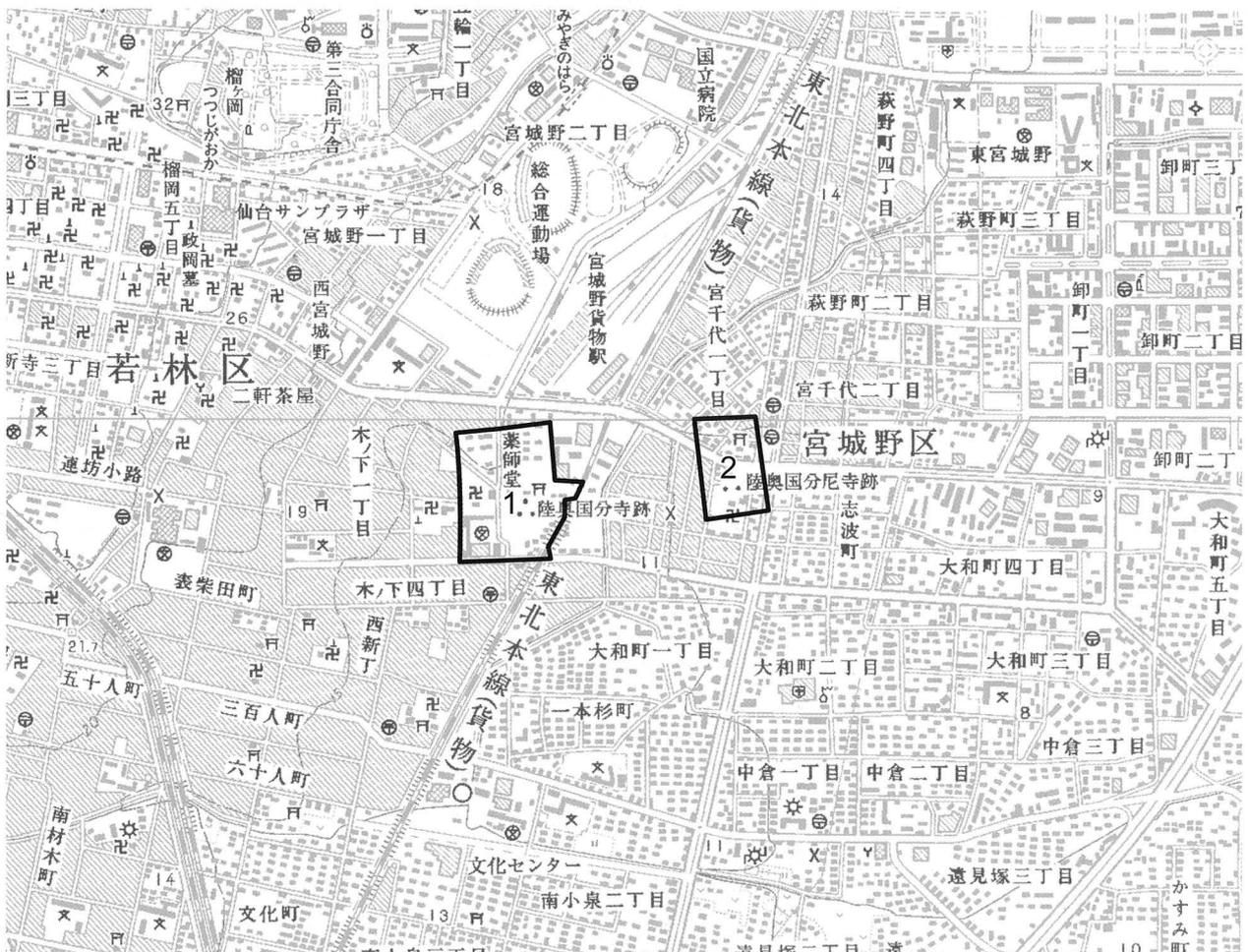
重機で盛土層と旧表土層を除去し、その直下層上面で精査を行った。なお、遺構は完掘せずに保存することを前提とし、基本的に土坑や柱穴などは半裁までに留めることとしている。

遺構実測のための基準杭は調査区の方に合わせて設定し、後にこの座標値を測量する方法をとった。平面図は基準杭を基に簡易遣り方を組んで1/20で作成した。断面図も1/20で作成している。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。

(2) 基本層序

調査区が広範囲なため、1～7区まで全区に共通する基本層序を把握することは困難であるが、盛土層下は概ね以下のように分けられる。なお、各区における基本層序は、必要に応じて後述する。

- I. 現代の表土層で暗褐色シルト～粘土質シルト層。
- II. 旧耕作土で、暗褐色や黒褐色のシルト層。
- III. 旧表土と推定される黒褐色の粘土層。
- IV. 褐色の粘土層で、上面が遺構確認面である。

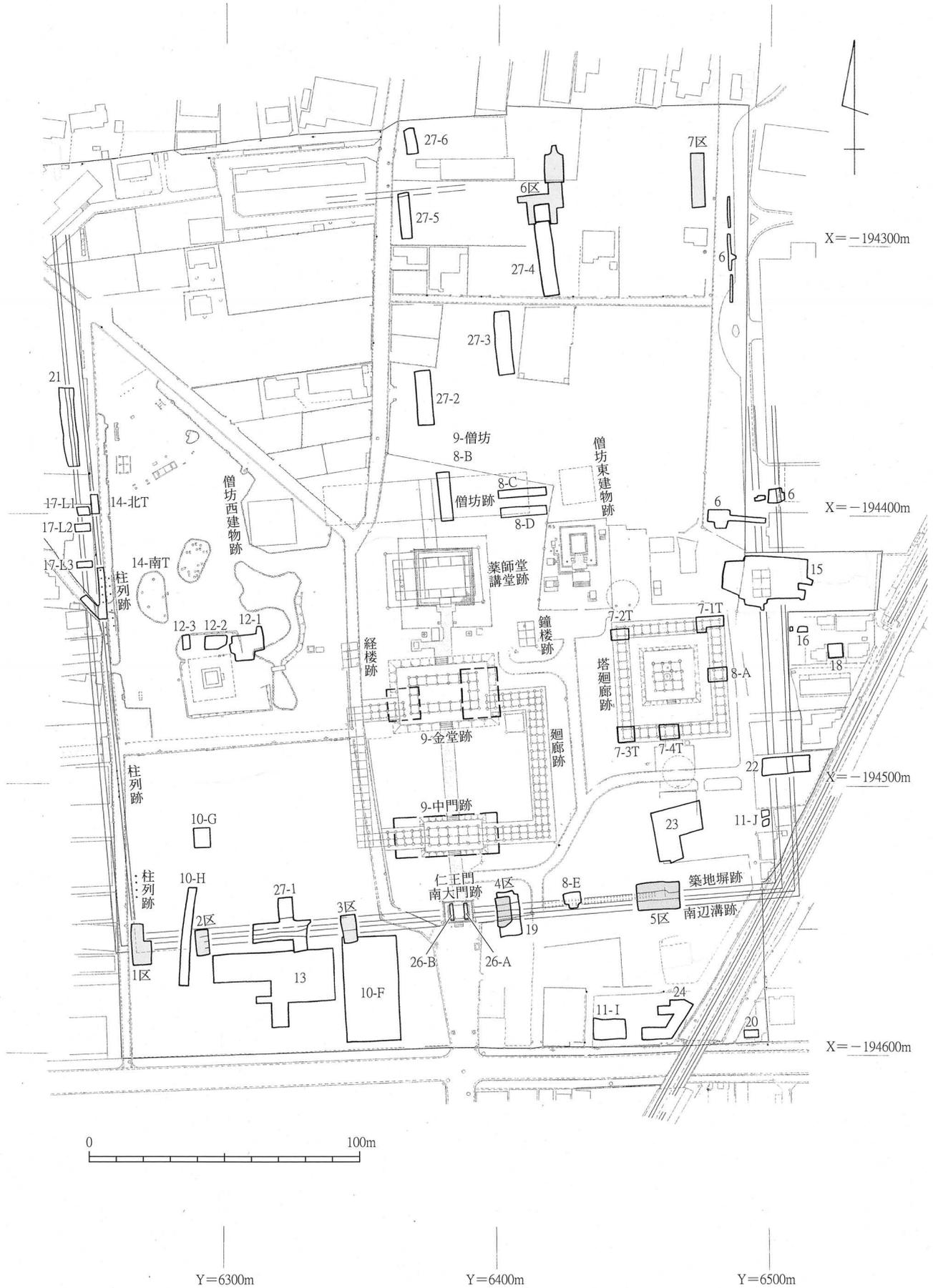


1. 陸奥国分寺跡 2. 陸奥国分尼寺跡

第1図 遺跡位置図

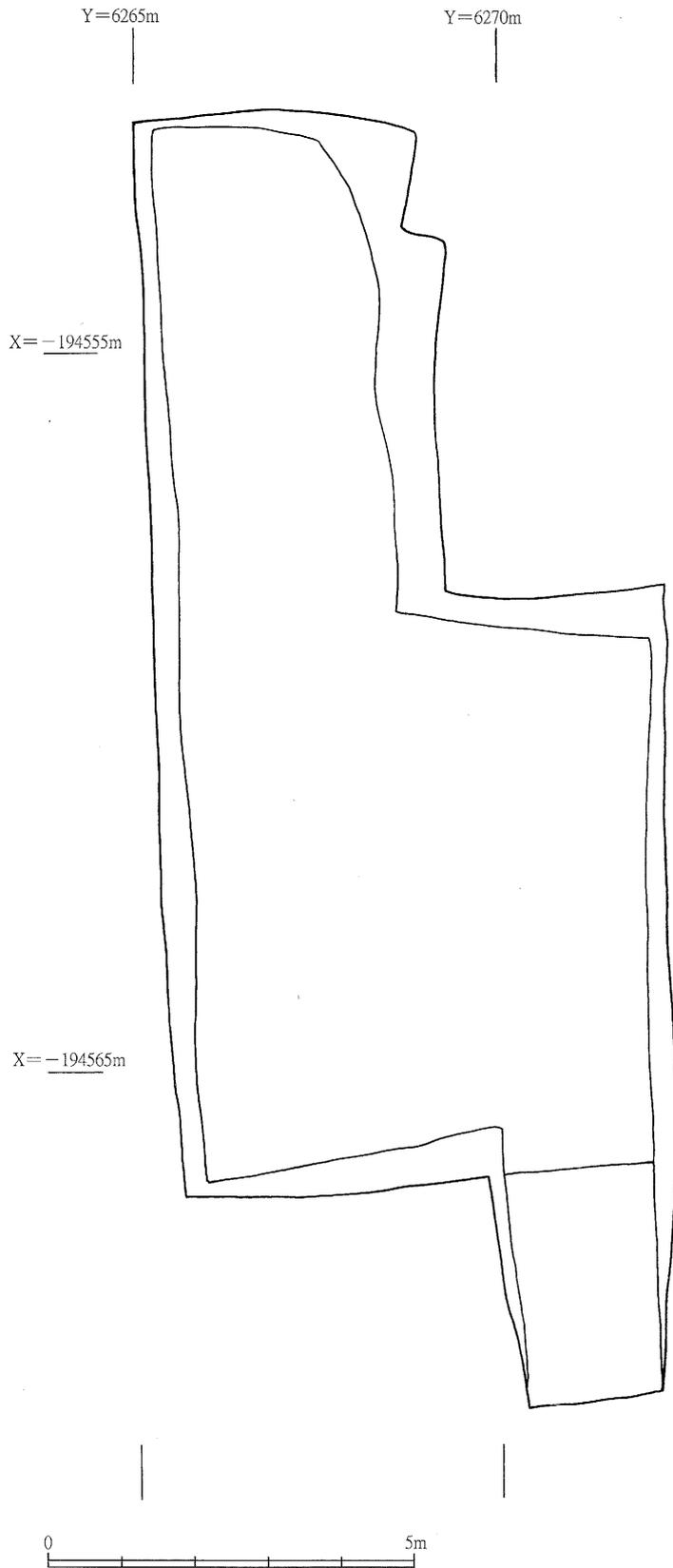
No.	年度	調査期間	調査面積	調査原因	調査箇所	調査主体	調査内容	文献
1	S30	8月12日～9月5日	4000	第1次	伽藍中心部	陸奥国分寺跡発掘調査委員会	金堂・廻廊・塔を確認	21
2	S31	8月1日～8月25日		第2次	伽藍中心部～北部		講堂跡・中門跡・廻廊跡・南大門跡・鐘楼跡・経楼跡・軒廊跡・僧坊の一部を確認	
3	S32	8月1日～8月30日		第3次	伽藍中心部～北部・西部		僧坊跡・塔跡・塔廻廊跡・塔北瓦溜を確認	
4	S33	8月11日～8月25日		第4次	伽藍中心部・東部・北西部		塔・塔廻廊跡・東門跡・僧坊西建物の一部を確認	
5	S34	8月1日～8月31日		第5次	伽藍北東部・北西部・西辺・北辺		僧坊西建物跡・僧坊東建物跡・西辺上の柱列(寄柱?)・講堂根石を確認、北辺は確認できず	
6	S42	4月1日～4月10日	120	現状変更事前調査(仙台鉄道教習所)	東門北東側、寺地北東部	宮城県教委	東門の北東部で東辺(?)の溝跡を確認、寺地北東部では北辺は確認できず	20
7	S47	48年2月15日～3月5日	150	環境整備(第1次)1～4トレンチ	塔院回廊(北東・北西・南西コーナー、南辺中央部)	仙台市教委	塔院回廊周辺で整地層(?)を確認、回廊基壇は確認できず	2
8	S48	12月10日～49年1月31日	240	環境整備(第2次)A～E区	塔院回廊(西辺中央部)、僧坊跡、南辺築地東部	仙台市教委	塔院回廊跡の根石を確認、僧坊跡基壇と雨落溝、根石を確認、南辺築地跡と北側に並行する溝跡を確認	3
9	S49	7月8日～8月7日	344	環境整備(第3次)	中門跡と廻廊、金堂跡、回廊跡、僧坊跡	仙台市教委	中門跡と廻廊の整地層と根石確認、金堂跡基壇と廻廊基壇確認、僧坊跡基壇と根石・掘立柱(?)確認	4
10	S50	6月12日～8月2日	1010	現状変更事前調査(聖和学園校舎、トイレ、下水管理設)F～H区	伽藍地南西外側	仙台市教委	南辺築地掘込地業と南辺の溝跡を確認、平安後期遺構の掘立柱建物跡11棟などを確認	5
11	S53	5月18日～6月13日	112	現状変更事前調査(共同住宅)I区(個人住宅)J区	伽藍地東辺南部、伽藍地南東外側	仙台市教委	東辺では築地を確認できず、南東部では土坑・溝・ピットなどを確認	6
12	S54	7月23日～8月23日	150	現状変更事前調査(位牌堂)1～3トレンチ	伽藍地西部、准胝観音堂北側	仙台市教委	灰白以降の基壇と根石を確認	8
13	S54	6月11日～8月3日	690	現状変更事前調査(聖和学園校舎)	伽藍地南西外側	仙台市教委	ピット・溝・土坑を確認、攪乱が多い	7
14	S55	3月24日～3月28日	72	現状変更事前調査(道路舗装)北トレンチ・南トレンチ	伽藍地西辺中央部	仙台市教委	版築(西辺築地?)・柱列(寄柱?)を確認	9
15	S55	7月8日～9月19日	400	環境整備(第4次)	東門跡	仙台市教委	東門基壇・築地掘込地業・寄柱・東辺の溝跡を確認	10
16	S56	10月23日～24日	12	現状変更事前調査(個人住宅)	東門跡南東部(外側)	仙台市教委	攪乱	11
17	S57	7月22日～8月11日	48	現状変更事前調査(共同住宅)L-1～3トレンチ	伽藍地西辺中央部	仙台市教委	西辺の溝跡を確認	12
18		11月24日～12月2日	21	現状変更事前調査(共同住宅)M区	伽藍地東辺南部(外側)	仙台市教委	南北方向の溝跡、土坑、柱痕跡を有するピットなどを確認	
19	S58	9月26日～11月15日	140	環境整備(第5次)	南大門東側築地跡	仙台市教委	南辺築地と南辺の溝跡を確認	14
20	S61	6月6日～6月11日	15	現状変更事前調査(個人住宅)	伽藍地南東外側	仙台市教委	攪乱	15
21	S62	7月9日～8月27日	242	範囲確認	伽藍地西辺	仙台市教委	西辺の溝跡を確認	16
22		10月26日～12月22日	137	範囲確認	伽藍地東辺	仙台市教委	東辺(?)の溝跡を確認	
23	H1	11月17日～12月27日	289	範囲確認	伽藍地南東部	仙台市教委	土坑5など	17
24	H16	12月13日～12月27日	128	現状変更事前調査(木ノ下こ道橋)	伽藍地南東外側	仙台市教委	基本層削平、攪乱	-
25	H17	6月29日	32	立会い(市営AP解体)	北西部	仙台市教委	柱穴3、土坑、溝、ピットなど	-
26	H17	11月15日～12月2日	18	範囲確認	南大門跡、仁王門礎石	仙台市教委	南大門跡掘込地業・根石を確認	18
27	H18	5月23日～8月11日	739	範囲確認1～6区	伽藍地南辺西部、北部	仙台市教委	南辺築地・溝跡、僧坊北側で柱列(?),土取穴、北東部で竪穴住居跡、北部で東西方向の溝跡を確認	19

表3 陸奥国分寺跡調査一覧



第2図 陸奥国分寺跡全体図 (数字は調査次数を示す、第1次～第5次を除く)

II. 1区の調査



第3図 1区平面図

1. 調査の概要

1区は伽藍地の推定南西コーナーに設定し、築地塀跡と南辺溝跡の南西隅の検出を目的としていた。当初は東西8m×南北15mに設定したが、盛土が予想以上に深かったため面積を予定よりもやや狭め、84㎡とした。現地表から約130cm下、標高約14.7mの深さまで掘り下げたが、盛土下面に到達できず、基本層を確認できなかった。隣接する2区の遺構確認面の標高は15.7mであることから、これよりも1m下で遺構が残存している可能性は皆無と判断し、調査を終了した。

III. 2区の調査

1. 調査の概要

2区は1区と昨年度の1区との中間に設定し、築地塀跡と南辺溝跡の検出を目的とした。大きさは東西5m×南北10mである。現地表から約60cm下で築地塀の掘り込み地業跡、南辺溝跡、土坑を確認したが、調査区南部と西半部は攪乱のため遺構は残存していない。

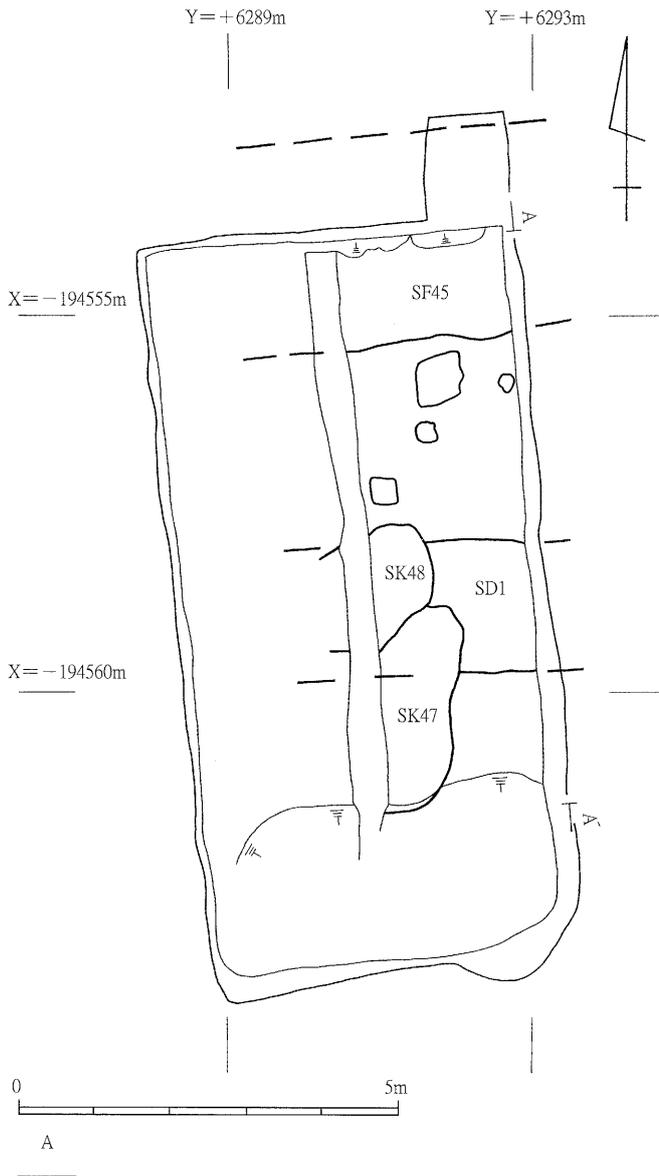
2. 基本層序

盛土層下で確認した基本層はⅠ・Ⅲ・Ⅳ層である。遺構はⅣ層上面で確認したが、調査区西壁の観察では南辺溝跡SD1はⅢ層上面から掘り込まれ、築地塀の崩落土がⅢ層上に乗っていることを確認している。

3. 遺構と遺物

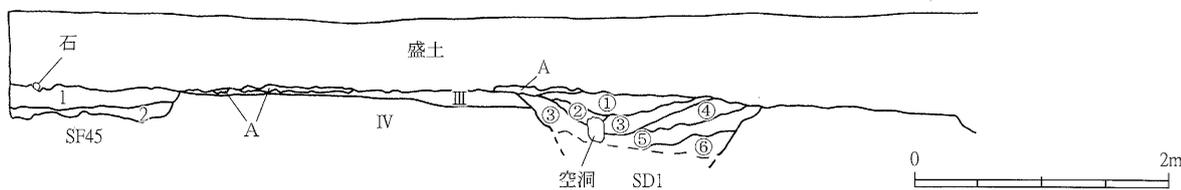
築地塀の掘り込み地業跡であるSF45、伽藍地南辺の溝跡であるSD1は昨年度調査の1区で確認された遺構の延長部分と判断されるため同じ番号を付けている。新たに確認されたのはSK47・48である。

SF45築地塀跡 築地塀本体は削平されて遺存しないが、基礎部分である掘り込み地業の版築層を確認した。掘り



込み地業は溝状を呈し、東西方向に延びているが、北の端が調査区外のため幅は不明である。調査区西半が攪乱を受けているため、遺構が残存するのは東西約2mの範囲である。方向は、掘り込み地業跡の南端と昨年度の1区で測定した場合E-4°36'-Nとなる(註1)。東壁際にトレンチを入れて確認したところ、掘り込み地業の深さは20~25cmで、状況のよい5区と比較すると25cm程度は削平されていると考えられる。掘り込み地業は暗褐色粘土ブロックを含む黒褐色粘土層による固い版築層となっており、暗褐色粘土ブロックの混合度合いによって2層に分層したが、実際は厚さ5mm前後の層が連続して積み重なっており、暗褐色粘土ブロックが横につぶれた状況が観察された。

SD1溝跡 調査区中央を東西方向に延びている。東壁際にトレンチを入れて断面を観察したが、底面までは掘り下げずに堆積土途中で留めている。上幅は1.95mで断面形は逆台形に近い。昨年度の1区で確認したSD1の東端との方向はE-4°37'-Nとなる。確認した長さは1.3mである。堆積土は粘土を主体とする自然堆積層で、上層には灰白色火山灰ブロックが少量含まれる。この溝跡は築地塀に平行して外側を巡る溝跡であり、溝跡の北側の肩と、築地塀の掘り込み地業跡の南側の推定線までの間隔は約2.6mである。



層位	色調	性質	混入物・その他
A	10YR3/3 暗褐色	粘土	築地塀崩落土と推定、黒褐色粘土ブロック(径5mm)、暗褐色粘土ブロック(径5~20mm)少量
SF45	1 10YR2/3 黒褐色	粘土	硬く叩き締められている、黒褐色粘土ブロック少量、暗褐色粘土ブロック多量、※粘土ブロックは厚5~15mm程度の横につぶれた状態
	2 10YR2/3 黒褐色	粘土	硬く叩き締められている、黒褐色粘土ブロック(径10~30mm)少量、暗褐色粘土ブロック(径30~50mm)多量、※粘土ブロックは1層ほどつぶれてはいない
SD1	① 10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	木炭粒微量、褐色粘土粒微量
	② 10YR3/4 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径2~5mm)少量、木炭粒微量
	③ 10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒微量、木炭粒微量
	④ 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	灰白ブロック(径10~30mm)少量
	⑤ 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
	⑥ 10YR3/3 暗褐色	粘土	

第4図 2区平面図、東壁断面図

遺物は土師器片や瓦片が18点出土し、G-1 連珠文軒平瓦が図化できた（第5図）。

SK47・48土坑に切られている。

SK47土坑 調査区南部に位置し、西半部が攪乱のため不明であるが、南北約2.7mの不整楕円形である。確認のみに留め、精査は行わなかった。

SD1 溝跡、SK48土坑を切っている。

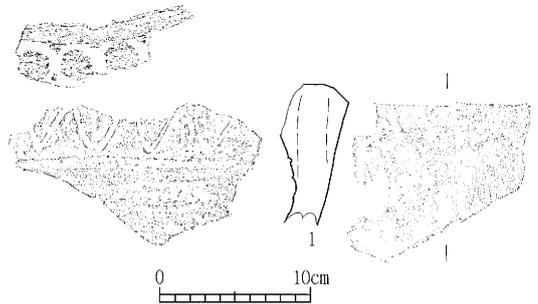
SK48土坑 調査区南部に位置し、西半部が攪乱のため不明であるが、南北約1.7mの楕円形と推定される。確認のみに留め、精査は行わなかった。

SD1 溝跡を切り、SK47土坑に切られている。

4. まとめ

築地塀の掘り込み地業跡であるSF45と南辺溝跡SD1を確認した。今回、これらの遺構の座標値を確定できたことで概ね南大門の西側における南辺の方位が明らかとなったと考えられる。昨年度の1区におけるSF45とSD1の方向は概ねE-6°-Nであったが、今年度の2区と総合するとE-4°36~37'-Nとなるので、現段階では概ねE-4°30~40'-N前後と考えられる。

（注1）昨年度調査の1区で確認したSF45掘り込み地業跡の南端の座標値を使用して算出した。本来、角度は溝の心々で計測すべきであるが、2区における北端が不明なため、この場合は南側の上端で計測した。なお、掘り込み地業跡は断面形が逆台形であるため、削平の状況によって上端の位置が異なってくる。したがって、それによって算出した角度も大きく異なる可能性がある。昨年度の1区と今年度の2区の場合では、南辺溝跡であるSD1との間隔がそれぞれ2.5mと2.6mであるので概ね同程度の削平を受けていると推定され、両地点を結んだ角度は概ね掘り込み地業の方向を示すと考えられる。



No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	調整・特徴	色調	写真 図版
1	G-1	2区・I層	軒平瓦	1/8	連珠文、頸部波状文、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：布目痕一部すり消し、糸切痕	紫灰	9-1

第5図 2区出土遺物

遺構・層位	土師器		須恵器		赤焼土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
SD1	8	6					10	340					
I層、攪乱	13	23					80	6,813	1	1	0	0	近世瓦1
計	21	29	0	0	0	0	90	7,153	1	1	0	0	近世瓦1

表4 2区遺物集計表

IV. 3区の調査

1. 調査の概要

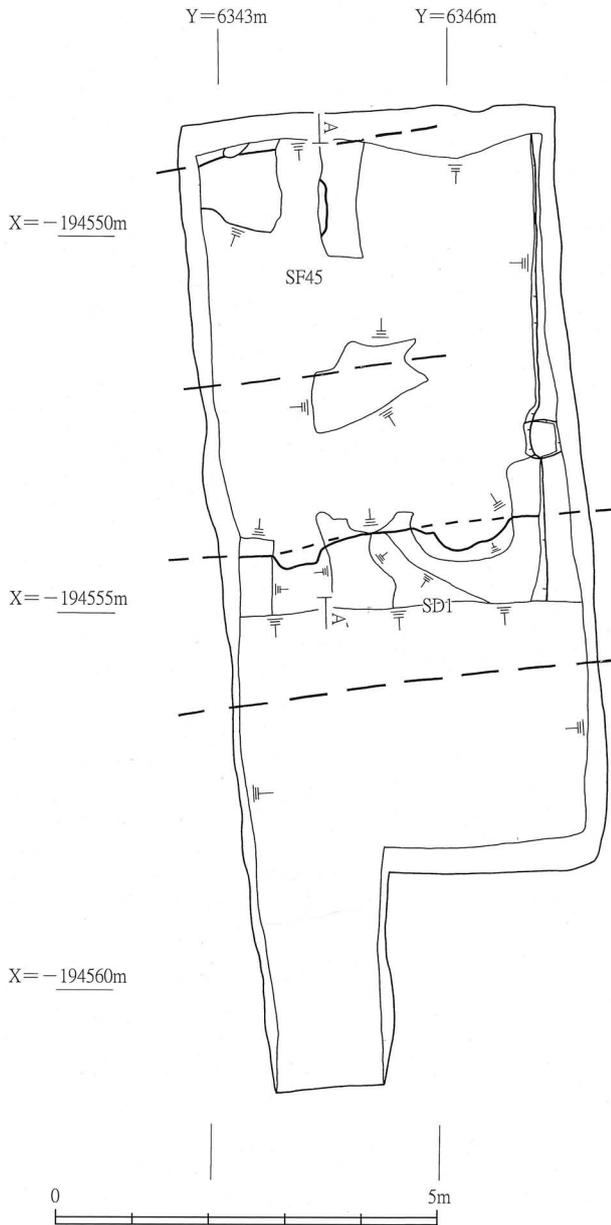
昨年度の1区から東に約20m離れた地点、南大門跡とのほぼ中間に設定し、築地塀跡と南辺溝跡の検出を目的とした。大きさは東西5m×南北10mである。現地表から約80cm下で築地塀の掘り込み地業跡と南辺溝跡を確認したが、調査区の大部分が深い攪乱を受けており、遺構は部分的に残存するのみである。

2. 基本層序

盛土層下で確認した基本層は部分的に残存するIV層のみである。遺構はIV層上面で確認した。

遺構・層位	土師器		須恵器		土師質土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
I層、攪乱	6	22			2	10	281	15,680	10	3	0	1	近世瓦10
計	6	22	0	0	2	10	281	15,680	10	3	0	1	近世瓦10

表5 3区遺物集計表



3. 遺構と遺物

築地塀の掘り込み地業跡であるSF45と、伽藍地南辺の溝跡であるSD1を確認したが、これらは昨年度調査の1区で確認した遺構の延長部分と考えられる。攪乱のため遺存状況は非常に悪い。

SF45築地塀跡 調査区北西コーナー付近で築地塀の掘り込み地業の版築層を確認したが、溝状の掘り込み地業の北端を長さ約2m確認できたのみである。攪乱の壁面で観察したところ、残存する掘り込み地業の深さは約20cmで、暗褐色シルト質粘土層による固い版築層となっている。

SD1溝跡 調査区中央を東西方向に延びている。溝の南半部は攪乱により失われているため、幅や深さ等は明確ではない。堆積土は粘土を主体とする自然堆積層である。

4. まとめ

調査区の大部分が攪乱を受けていたため、築地塀跡と溝跡の一部を確認できたのみである。

V. 4区の調査

1. 調査の概要

4区は南大門跡の東側約10m、概ね第19次調査区（昭和58年の調査区）の西半部と重複するように設定し、築地塀跡と南辺溝跡の検出を目的とした。大きさは東西5m×南北10mである。前調査時の埋め戻し土を除去し、遺構を再検出した。



層位	色調	性質	混入物・その他
SF45 1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色・黒褐色粘土ブロック多量、厚5~10mm程度につぶれている
SD1	①	粘土	褐色粘土ブロック（径5~10mm）微量
	②	粘土	褐色粘土ブロック（径5~10mm）多量
	③	粘土	灰白ブロック微量

第6図 3区平面図、SF45・SD1断面図

2. 基本層序

調査区の西部でⅠ層（表土）、その直下に旧表土と考えられるⅢ層とⅣ層を確認した。築地塀の掘り込み地業跡はⅢ層上面から掘り込まれている。Ⅰ層はⅠa～Ⅰf層に細分した。

Ⅰa層 10YR 3 / 4 暗褐色シルト。礫を多量に含む。

Ⅰb層 10YR 3 / 3 暗褐色シルト。礫を少量含む。

Ⅰc層 10YR 3 / 2 黒褐色粘土質シルト。礫を少量含む。

Ⅰd層 10YR 3 / 3 暗褐色粘土。褐色粘土粒を少量含む。やや硬い。

Ⅰe層 10YR 2 / 3 黒褐色シルト質粘土。褐色粘土粒を少量、礫を少量含む。

Ⅰf層 10YR 4 / 4 褐色粘土。暗褐色粘土粒、褐色粘土粒を多量に含む。

3. 遺構と遺物

昭和58年の調査時以来、再確認したのは当時の番号でSF-1 築地跡、SD-2 溝跡、SK-3 土坑、SK-4 土坑、P12・14・15・32・33である。新たに確認した遺構は西壁際のP1のみである。なお、SF-1 築地跡、SD-2 溝跡についてのみ、記述の関係上新たな遺構番号をつけた。(SF-1 → SF49、SD-2 → SD50)

SF49築地塀跡 第19次調査(昭和58年調査)のSF-1である。南辺西部の築地塀跡はSF45としたが、東部は間に南大門を挟むため別な番号とした。東西方向の掘り込み地業跡と、その上に積まれた築地塀からなる。掘り込み地業跡はⅢ層上面から掘り込まれ、幅2.7～3.2mの溝状を呈している。今回は上面の確認に留め、底面まで検出しなかったが、昭和58年の調査結果によれば(註1)掘り込み地業跡のⅢ層上面からの深さは35～40cmである。断面形は逆台形であるが、上部は緩やかに大きく開く。版築層は3層確認し、褐色粘土ブロックを含んだ暗褐色や黒褐色の粘土を主体としている。

掘り込み地業の版築層の上には、築地塀の版築層が積み上げられているが、築地塀跡は木の根の攪乱が著しく、遺存状況は良くない。Ⅲ層上面からの高さは、最もよく残存する箇所約30cmである。南西部では部分的ながらも北側と南側とで積み手の違いが認められ(第8図上)、北側の版築層が垂直に近く立ち上がることからこの部分が築地塀の南側の立ち上がりだと推定される。なお、南側の部分(第8図3～5層)は築地本体の構築後に積まれた犬走りか、あるいは修復の際の積み土と考えられるが、部分的に確認できただけなので断定はできなかった。

西壁際で新たに確認したP1は南北約40cm、東西約20cmの楕円形を呈する。柱痕跡は確認できなかったが、築地南側の立ち上がりだと推定される線上に位置している。築地の版築層を切っており、築地塀に伴う寄柱の柱穴の可能性が考えられたが、築地塀の北側で対になる柱穴を確認できなかったため確定はできなかった。なお、昭和58年調査のP32(S58-P32)は築地塀南面の推定線よりも約30cm外側に位置している。築地塀跡北側の概ね対称位置にあるS58-P31と共に築地塀構築工事の際に堰板を押さえた添柱の柱穴である可能性がある。なお、築地塀跡北側の立ち上がり、南側と同様に柱穴中心から約30cm離れていると仮定すると、築地塀の底面幅は約2.5mと復元できる。

SD50溝跡 第19次調査のSD-2であり、伽藍地南辺の区画溝である。南辺西部の溝跡はSD1としたが、東部は別な番号とした。昭和58年の埋め戻し土を一部除去して、上幅を再確認するに留めている。

S58-SK3 第19次調査ではセクションベルトの下で未調査の部分を掘り下げたため、瓦片等が約140点出土している(第10図)。

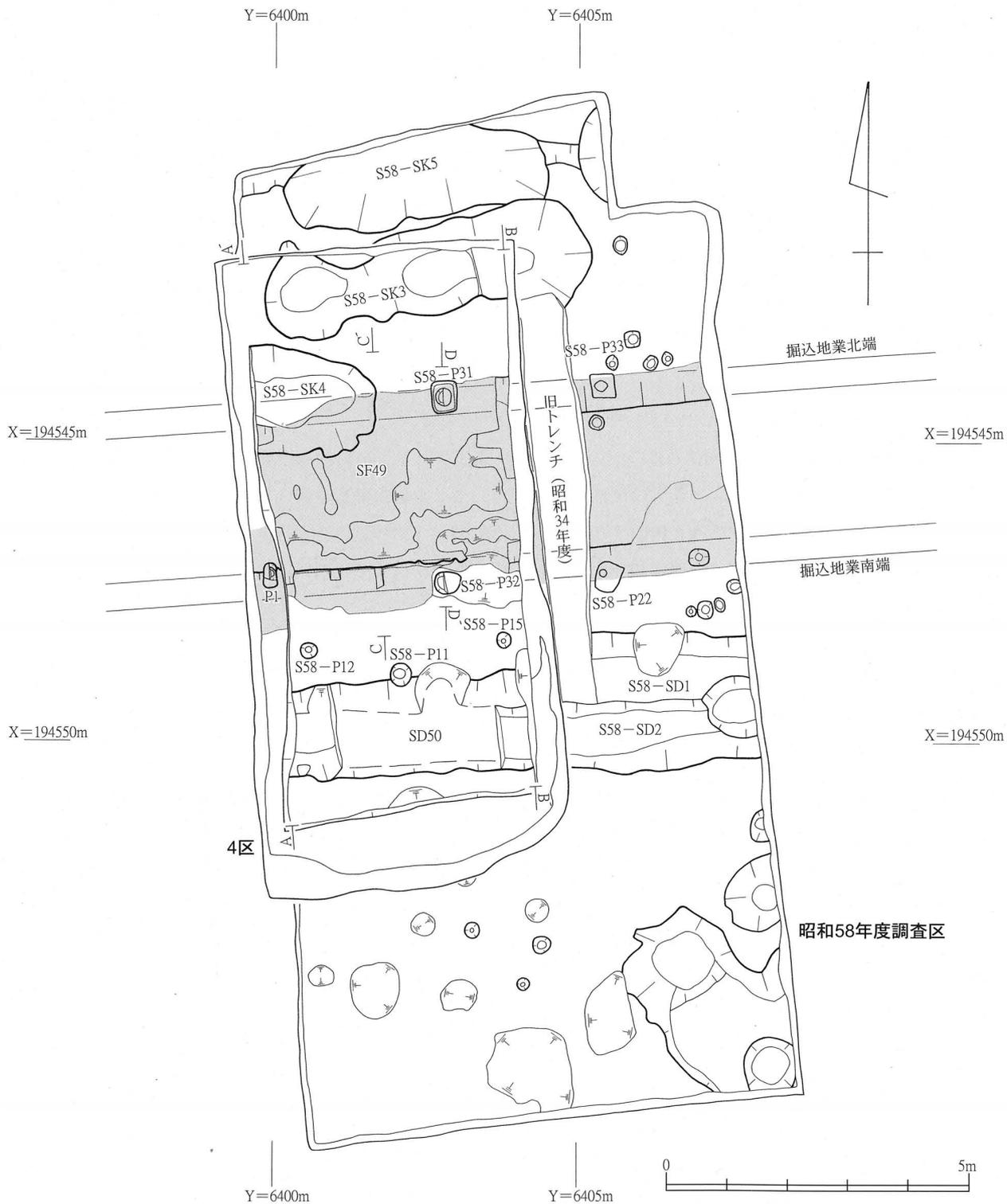
4. まとめ

南辺東部において、築地塀の掘り込み地業跡であるSF49と南辺溝跡SD50を再確認した。今回の調査と平成17年度の南大門跡の調査結果を総合することにより、南辺東部の築地塀跡と南大門跡との位置関係が明らかとなった。また、築地塀跡の掘り込み地業と築地塀本体の様相もある程度明らかとすることができた。

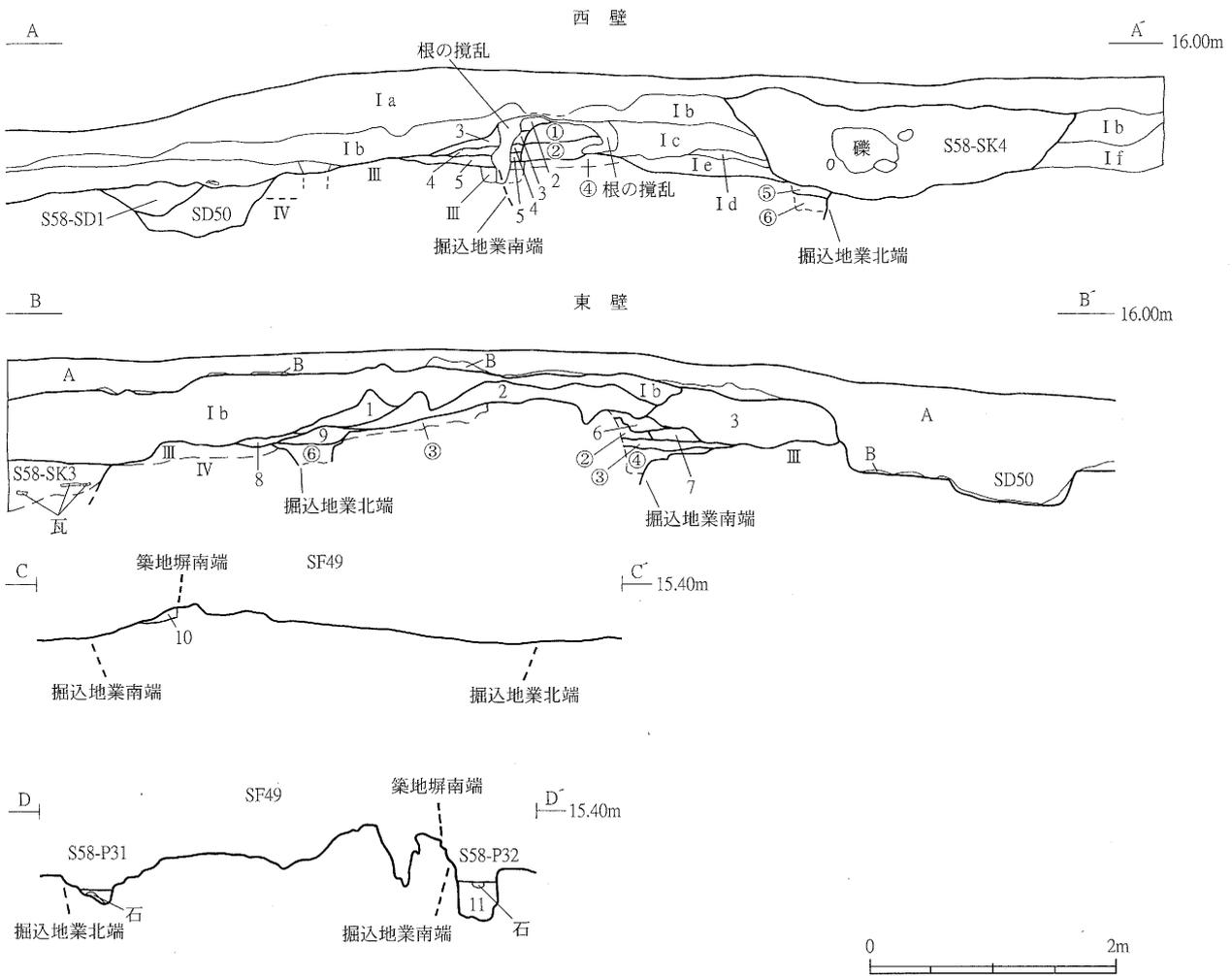
(註1) 昭和58年の調査では、昭和34年のトレンチを再掘削して掘り込み地業跡と築地塀の断面を観察している。

遺構・層位	土師器		瓦質土器		土師質土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
S58-SK3	1	4					137	28,860		1			
P1							1	20					
I層、攪乱	14	198	1	190	42	962	1,189	92,401	21	41	0	8	近世瓦44
計	15	202	1	190	42	962	1,327	121,281	21	42	0	8	近世瓦44

表6 4区遺物集計表

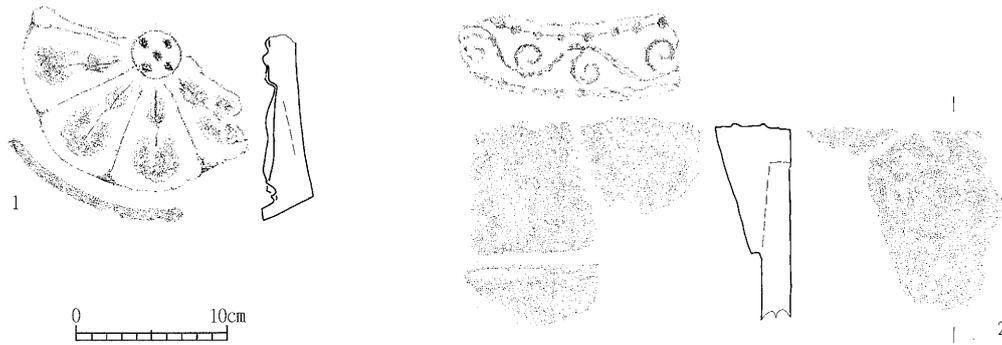


第7図 4区、昭和58年度調査区平面図 (アミ点は版築層の範囲)



層位	色調	性質	混入物・その他
A			昭和58年調査時の埋戻土
B			昭和59年調査時の埋戻砂
1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5~10mm)少量、硬い、築地塀の崩落土
2	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径3~5mm)多量、硬い、築地塀の崩落土
3	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック(3~5mm)少量、硬い、犬走りか修復の積土
4	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径3~5mm)微量、硬い、犬走りか修復の積土
5	10YR3/3 暗褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック(径5~15mm)少量、褐色粘土ブロック(5~10mm)多量、硬い犬走りか修復の積土
6	10YR4/4褐色	粘土	暗褐色粘土粒少量、褐色粘土ブロック(径3~5mm)少量、硬い
7	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径10~20mm)多量、硬い
8	10YR3/4 暗褐色	粘土	褐色粘土粒多量、硬い
9	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5~10mm)多量、黒褐色粘土ブロック(径10mm)少量、硬い
10	10YR3/3 暗褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック(径3~5mm)少量、褐色粘土ブロック(径10~20mm)多量
11	10YR2/3 黒褐色	粘土	
SF49	① 10YR4/3にぶい黄褐色 10YR4/4褐色	粘土 } 互層	硬い、築地塀版築 黒褐色粘土ブロック(厚5~20mmにつぶれる)少量 褐色粘土ブロック(厚5~20mmにつぶれる)多量 暗褐色粘土ブロック(厚3~5mmにつぶれる)少量
	② 10YR4/6褐色 10YR3/3暗褐色	粘土ブロック } 混合	厚5~20mmにつぶれる、斑文状、築地塀版築
	③ 10YR2/3 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック(厚5~10mm程度に横につぶれている)少量、掘込地業版築
	④ 10YR3/3 暗褐色	粘土	硬い、褐色粘土粒少量、礫少量、掘込地業版築
	⑤ 10YR2/3 黒褐色	粘土	硬い、褐色粘土ブロック(径5~10mm)少量、掘込地業版築
	⑥ 10YR2/3 黒褐色	粘土	あまり硬くない、褐色粘土ブロック(径5mm)少量、掘込地業版築

第8図 4区西壁・東壁・SF49断面図



No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	調整・特徴	色調	写真 図版
1	B-1	4区・I層	軒丸瓦	瓦当面1/2	八葉重弁蓮華文（国分寺第4類）、白針なし	浅黄	9-3
2	G-2	4区・I層	軒平瓦	1/8	偏行唐草文、頸部ナデ、凸面：縄目すり消し、凹面：布目痕	褐灰	9-2

第9図 4区出土遺物（1）

VI. 5区の調査

1. 調査の概要

伽藍地の南辺東部には、築地塀の痕跡が土手状の高まりとして約40mの長さで残っている。5区はこの地表面で築地塀の痕跡が認められる箇所の最も東側に設定した。大きさは東西20m×南北10mである。調査区南半部は攪乱が著しく、遺構面自体もほとんど遺存していない。築地塀跡は北半部では積土がわずかに残存していたが、南半部は削平されていた。築地塀跡の掘り込み地業跡も削平が著しいものの、概ね残存していた。南辺溝跡は確認できなかった。

2. 基本層序

調査区の北西部でI層（表土）、その直下に旧表土と考えられるIII層とIV層を確認した。築地塀の掘り込み地業跡はIII層上面から掘り込まれている。I層はIa～Ig層に細分した。

Ia層 10YR 4／3 にぶい黄褐色シルト。礫を多量に含む。

Ib層 10YR 3／3 暗褐色粘土と10YR 2／2 黒褐色粘土の互層。

Ic層 10YR 3／4 暗褐色シルト。

Id層 10YR 4／3 にぶい黄褐色粘土質シルト。礫を少量含む。

Ie層 10YR 3／4 暗褐色粘土。礫を少量含む。

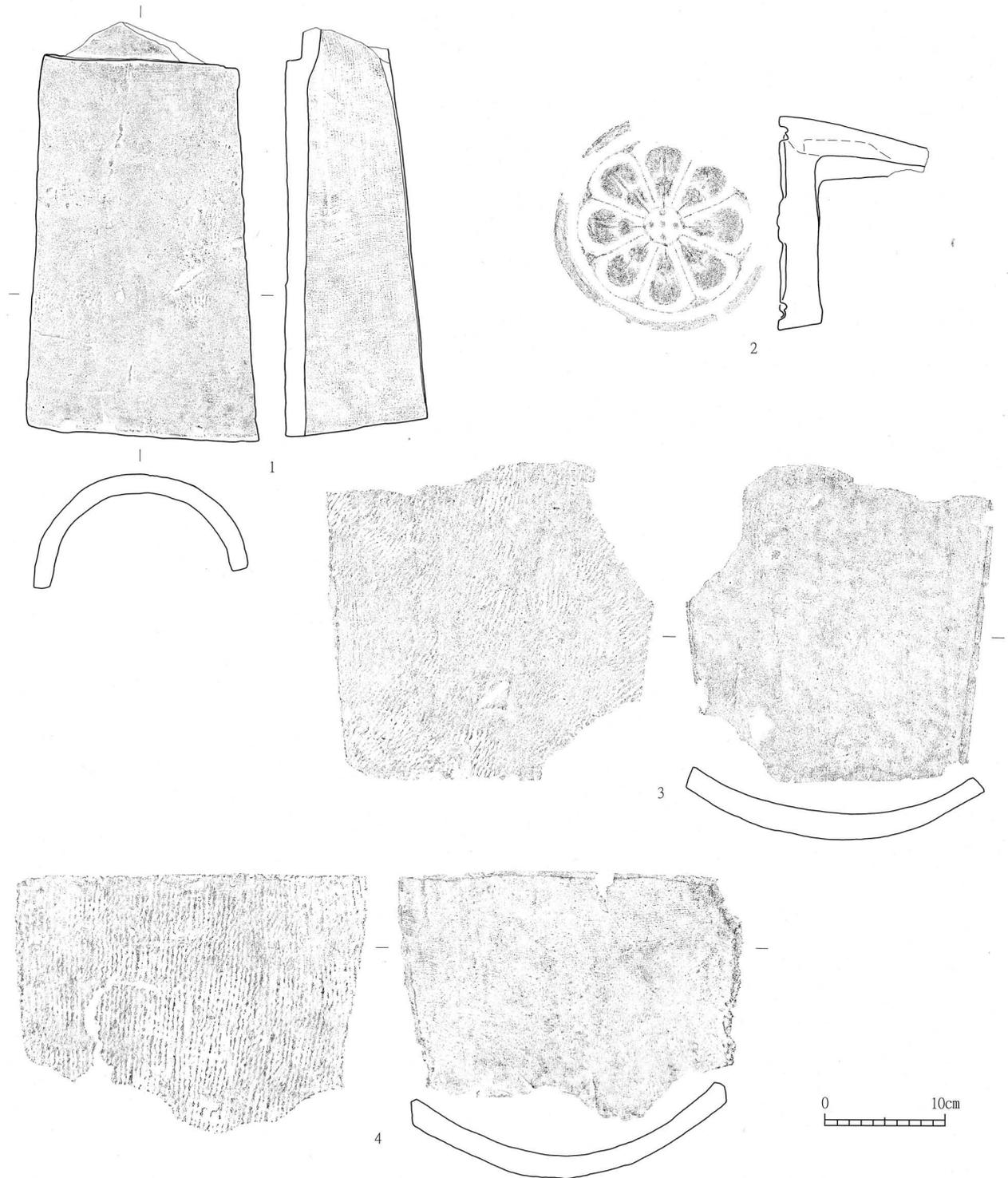
If層 10YR 3／3 暗褐色粘土。褐色粘土粒を少量含む。

Ig層 10YR 3／3 暗褐色粘土。

3. 遺構と遺物

確認したのは4区で再確認したSF49築地塀跡の延長部分、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、ピット4基である。

SF49築地塀跡 4区からの延長部分である。東西方向の掘り込み地業跡と、その上に積まれた築地塀からなる。調査区東部と南部は削平を受けているため、比較的遺存状態が良いのは確認できた部分の1／4程度であり、残りの3／4は掘り込み地業跡の下半部が残っているのみである。掘り込み地業跡はIII層上面から掘り込まれている。比較的遺存状態のよい調査区西部では幅約3.2mの溝状を呈しているが、南側の上部が削平されているので本来はさらに20～30cm程度幅広であった可能性がある。掘り込み地業跡のIII層上面からの深さは50～55cmである。断面形は

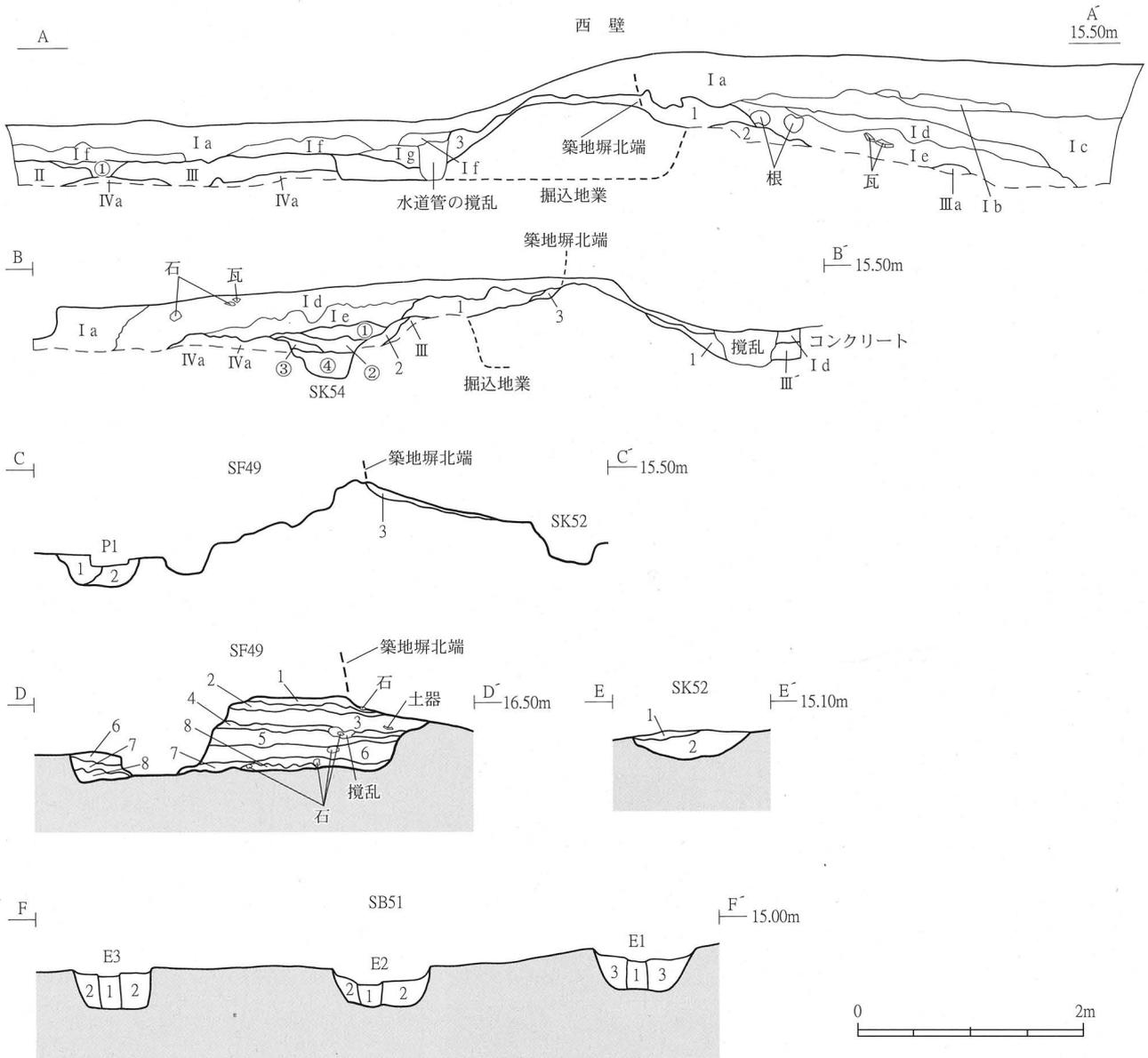


No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	調整・特徴	色調	写真 図版
1	F-3	4区・S58-SK3	丸瓦	9/10	凸面:縄叩き(細い・縦位)、ロクロナデ、凹面:布目痕、粘土紐痕、厚18mm、白針なし	にぶい黄橙	9-7
2	F-2	4区・S58-SK3	軒丸瓦	1/2	八葉重弁蓮華文(国分寺第6類)、白針なし	黄灰	9-4
3	G-5	4区・S58-SK3	平瓦	1/2	凸面:縄叩き(細い・斜位)、凹面:布目痕一部すり消し、側面・小口面ヘラケズリ、厚23mm	暗赤褐	9-5
4	G-4	4区・S58-SK3	平瓦	1/2	凸面:縄叩き(細い・縦位)、凹面:布目痕一部すり消し、側面・小口面ヘラケズリ、厚21mm	褐灰	9-6

第10図 4区出土遺物(2)



第11図 5区平面図 (アミ点は版築層と崩落土の範囲)



第12図 5区西壁、SF49・SK52・SB51断面図

逆台形で、上部は緩やかに大きく開く。版築層は6層確認し、褐色粘土ブロックを含んだ暗褐色や黒褐色の粘土が硬く叩き締められている。

掘り込み地業の版築層の上には、築地塀本体の版築層が積み上げられている。大部分は崩落しており、残った部分も木の根等の攪乱が著しく、遺存状況は良くない。掘り込み地業跡の北端から40~70cmの位置で、高さ5~10cmの築地塀本体の北側の立ち上がりを確認した。Ⅲ層上面からの高さは、最もよく残存する箇所では25~30cmである。

SB51掘立柱建物跡 調査区北西部で東西方向に並ぶ柱穴3基を確認した。西と北の調査区外に展開する掘立柱建物跡と推定したが、一本柱列跡の可能性もある。柱穴掘り方は一辺70~90cmの方形で、残存する深さは約30cm、柱痕跡は直径18~22cmである。柱間隔はE1~E2が2.4m、E2~E3が2.3mである。

SK52土坑 調査区東部の築地塀跡北側に位置する。東側を削平されている。東西2.4m以上、南北1.0mの楕円形である。深さは25cm、壁は緩やかで、底面はほぼ平坦である。堆積土の上層には灰白色火山灰が含まれている。

遺物は、瓦片が3点出土している。

	層位	色調	性質	混入物・その他
A-A'	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒多量、築地塀の崩落土
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	灰黄褐色シルト質粘土粒微量、築地塀の崩落土
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5mm)多量、築地塀の崩落土
	①	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色粘土ブロック(径5mm)、粒子多量
B-B'	Ⅲ*	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトを斑文状に含む(攪拌されたⅢ層)
	①	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	
	②	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	灰白ブロック(径10~80mm)多量
	③	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	灰白ブロック(径5~10mm)微量
	④	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒多量
	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	褐色粘土粒多量、築地塀の崩落土
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒多量、築地塀の崩落土
C-C'	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	褐色粘土粒少量
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	褐色粘土ブロック(径5~10mm)多量
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック(径5~10mm)微量、築地塀の崩落土
D-D'	1	10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土 粘土	斑文状の混合 硬い、築地塀版築
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径10~20mm)多量、掘込地業版築
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5~10mm)微量、掘込地業版築
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5~70mm)少量、礫少量、掘込地業版築
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径10~20mm)微量、礫少量、掘込地業版築
	7	10YR2/2 黒褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック(径5~20mm)少量、礫少量、掘込地業版築
	8	10YR3/4 暗褐色	粘土	礫少量、掘込地業版築
E-E'	1	10YR4/4 褐色	シルト	灰白ブロック少量
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	
F-F'	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色粘土粒少量
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	褐色粘土ブロック(径20~30mm)多量、硬い
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5~10mm)、同微粒子、硬い

SK55を切っている。

SK53土坑 調査区北部に位置し、北半部は調査区外となっている。東西約2m、南北2m以上の不整な楕円形と推定される。深さは約15cm、壁は比較的急で、底面の南側には深さ40cm程の窪みがある。堆積土はI d層に類似したシルト層である。

SK55を切っている。

SK54土坑 調査区ほぼ中央の築地塀跡北側に位置する。東西1.3m以上、南北0.6mの楕円形である。深さは約45cm、壁は下半部が急であるが、上部は緩やかで大きく開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は自然堆積層で、上層には灰白色火山灰が含まれている。

遺物は、瓦片が2点出土している。

築地塀の崩落土を切っている。

SK55土坑 調査区東部の築地塀跡北側に位置する。長さ1m以上、幅60cmの長楕円形を呈する。深さは約10cm、壁は比較的急で、底面は平坦である。堆積土はI d層に類似したシルト層である。

SK52・53に切られている。

ピット 築地塀跡の南面の推定線上でP1・P2を確認し、築地塀北面の推定線から約30cm外側の位置でP3・P4を確認したが、築地塀の積み土との関係が明らかでないため性格を限定することはできなかった。

出土遺物 I層中から瓦片約3,500点、土師器や須恵器など古代の土器類が約40点、土師質土器、瓦質土器など近世以降の土器類と瓦片が約320点出土した。軒平瓦はG-6均整唐草文、G-7・8重弧文、G-10連珠文が図化できた(第13図)。G-11は凹面に刻印が認められるが、表面が剥離しているため判読できなかった(第13図6)。なお、土師質土器Ia-1小皿は近世、Ia-2燈籠は中世以降と推定される(第14図3・4)。



No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	調整・特徴	色調	写真図版
1	G-6	5区・I層	軒平瓦	1/10	均整唐草文、頸部ナデ、凸面：縄叩き、凹面：布目痕、糸切痕	灰オリーブ	10-1
2	G-8	5区・I層	軒平瓦	1/7	重弧文、頸部山形文・単弧文・重弧文、凹面：布目痕	灰	10-4
3	G-7	5区・I層	軒平瓦	1/8	重弧文、頸部山形文・重弧文、凹面：布目痕	灰	10-2
4	G-10	5区・I層	軒平瓦	1/12	連珠文、頸部縄叩き→波状文、凹面：布目痕	オリーブ黒	10-3
5	H-1	5区・I層	道具瓦・炭斗瓦	小片	凸面：布目痕、平行叩き、側面・小口面ヘラケズリ 凹面：布目痕、糸切り痕、側面・小口面ヘラケズリ	浅黄	10-7
6	G-11	5区・I層	平瓦	部分	凸面：縄叩き、凹面：布目痕、刻印有り、厚21mm	オリーブ黒	10-6
7	G-9	5区・I層	平瓦	1/5	凸面：平行叩き、凹面：布目痕一部すり消し、厚20mm	にぶい黄橙	10-5

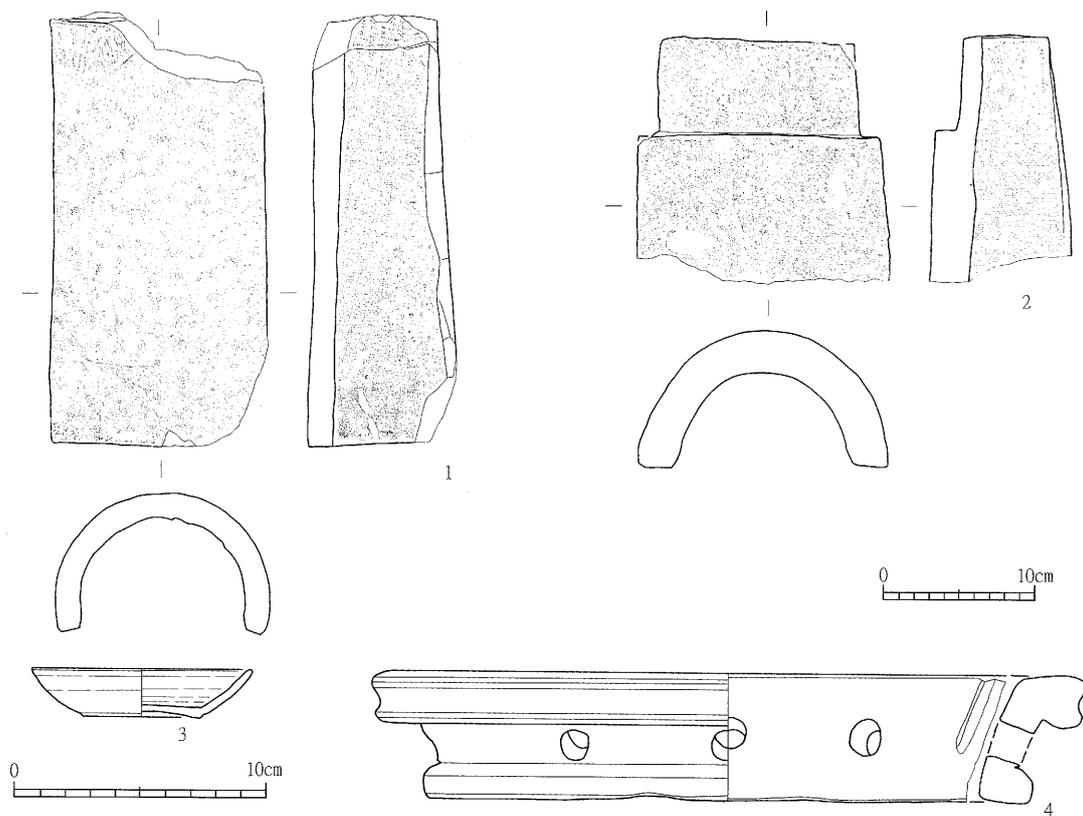
第13図 5区出土遺物(1)

4. まとめ

SF49築地塀跡では、掘り込み地業と北側の立ち上がりを捉えることができた。4区の調査成果と総合すると、掘り込み地業の幅は約3.4m、築地塀の下端幅は約2.5m(8.5尺)と推定される。4区・5区を総合した掘り込み地業の方向はE-4°23'-Nである。南辺溝跡SD50は確認できなかった。調査区西壁の観察では、溝が掘り込まれたと推定されるⅢ層(旧表土)は50cm近く削平されていると考えられるので、溝はすでに失われている可能性が高い。

遺構・層位	土師器		須恵器		土師質土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
SK52							3	660					
SK54							2	197					
P3							1	13					
築地崩落土	3	8			29	155	103	9,000	2				近世瓦3、土製品1
I層、攪乱	31	97	7	89	82	1,953	3,502	328,889	25	40	8	8	瓦質土器11、近世瓦157、土製品1
計	34	105	7	89	111	2,108	3,611	338,759	27	40	8	8	瓦質土器11、近世瓦160、土製品2

表7 5区遺物集計表



No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別・器種	遺存度	法量 (cm)			調整・特徴	色調	写真 図版
					口径	底径	器高			
1	F-5	5区・1層	丸瓦	4/5				凸面：ロクロナデ、凹面：布目痕、布合わせ痕、側面・小口面ヘラケズリ、厚1.3~2.5mm、白針なし	にぶい橙	10-9
2	F-6	5区・1層	丸瓦	2/5				凸面：縄叩き→ナデ、凹面：布目痕、側面：ヘラケズリ、厚2.9mm、白針なし	オリーブ黒	10-8
3	Ia-1	5区・1層	土師質土器・灯明皿	ほぼ完形	8.6	4.6	1.9	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整、白針なし、口縁端部にタール状の付着物		10-11
4	Ia-2	5区・1層	土師質土器・灯籠	1/4	(28.1)	(23.5)	5.1	ロクロ調整、白針なし		10-10

第14図 5区出土遺物 (2)

VII. 6区の調査

1. 調査の概要

6区は寺地の北東部、昨年度の4区の北側に設定した。昨年度、北部の5区で確認した比較的規模の大きなSD32溝跡の東側への伸びを確認するのが目的である。調査予定地は北半部が約1.2mの厚さに盛土されており、コンクリート製の擁壁が造られている。調査区は中央に擁壁を挟んで東西幅5m×南北長20mである。擁壁の北側は攪乱が著しく、遺構面の約2/3は遺存していない。南半部には大きな土坑状の攪乱が入っていたが、掘立柱建物跡を確認したため調査区を南と西に拡張している。

2. 基本層序

盛土下でI~IV層を確認した。掘立柱建物跡はIII層上面から掘り込まれている。I層はIa~Ic層に細分した。

Ia層 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト。褐色粘土ブロックを少量含む。

Ib層 10YR 3/3 暗褐色シルト。

Ic層 10YR 3/3 暗褐色粘土。

3. 遺構と遺物

確認したのは竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土坑5基、性格不明遺構1基である。

SI60竪穴住居跡 調査区南部に位置する。南半部を攪乱で失い、東部が調査区外となっているので大きさは確定できないが、東西3.8m以上、南北5.3m以上である。西壁の方向はN-7°-Wであるが部分的な検出であるので明確ではない。床面までの深さは5~10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は緩やかな凹凸がある。掘り込んだ面をそのまま床にしており、貼床は認められない。堆積土は2層である。北西部に張り出しがあり、焼土ブロックが少量堆積していた。構築材等は認められなかったが、カマドの痕跡と考えられる。

遺物は土師器、赤焼土器、須恵器、瓦、土製品、鉄製品等の破片が約270点出土した。図化できたのは用途不明の土製品P-1と鉄釘Na-1である(第24図4・5)。

SK58・59・63・64に切られている。

SI61竪穴住居跡 調査区南部に位置する。西半部に攪乱があり、東側の周溝とカマドの掘り方と考えられる窪みを確認できたのみである。大きさは確定できないが東西3m以上、南北3.8m以上である。東壁の方向はN-8°-Wであるが部分的な検出であるので明確ではない。床面は既に失われているため、床面の状況、壁、堆積土などは不明である。北部に張り出しがあり、焼土ブロックが少量堆積していたのでカマドの掘り方と考えられる。

遺物は土師器、赤焼土器、須恵器、瓦、鉄製品等の破片が約230点出土した。図化できたのはカマド掘り方から出土した土師器D-1高台付坏である(第24図3)。

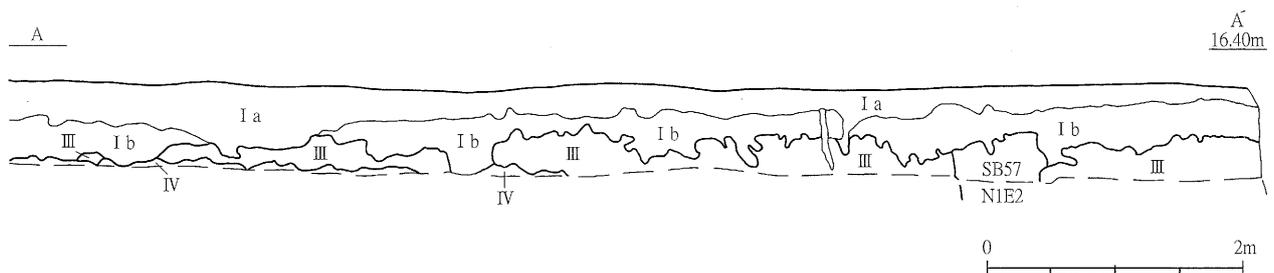
SB57を切り、SK58に切られている。

SI66竪穴住居跡 拡張区に位置する。南半部が調査区外となっているので大きさは確定できないが、東西4m、南北3.3m以上である。西壁の方向は概ね真北方向である。床面までの深さは約5cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、掘り込んだ面をそのまま床にしており、貼床は認められない。堆積土は2層である。北壁の西寄りに張り出しがあり、焼土ブロックが少量堆積していた。構築材等は認められなかったが、カマドの痕跡と考えられる。

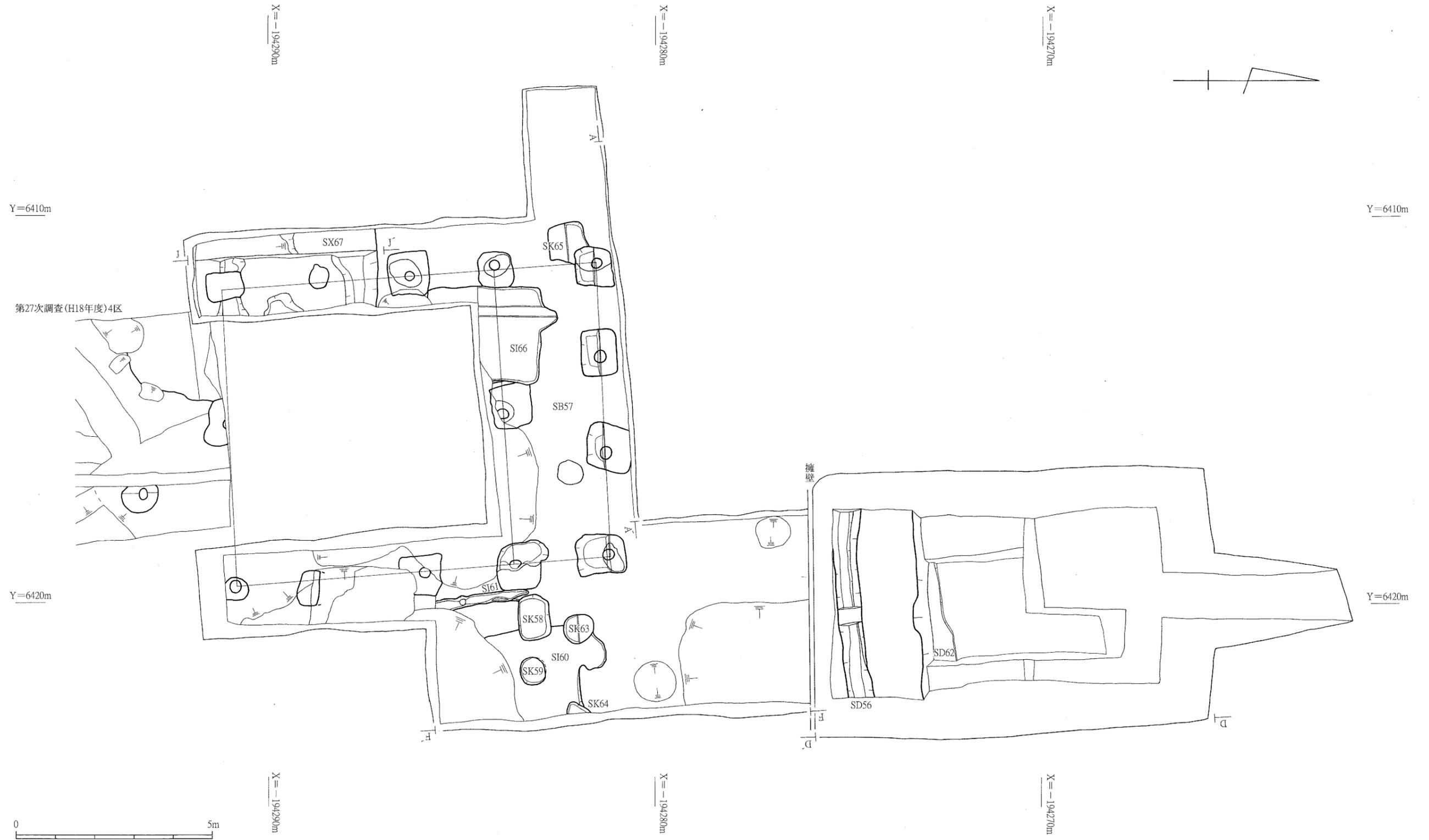
遺物は土師器、赤焼土器、須恵器、瓦等の破片が約90点出土した。

SB57-N2W1・N2W2・N2W3を切っている。

SB57掘立柱建物跡 調査区南西部で南北方向に並ぶ柱穴3基を確認したため、調査区を拡張して全体を確認した。昨年度の4区の平面図と照合したところ、北端部のSB48-N1としていた柱穴も含む建物であることが判明したが、攪乱や他の遺構によって上部が失われた柱穴も多く、概して南半部の遺存状態がよくない。東西2間、南北4間の建物跡で、北側に廂が付く南北棟である。南北長9.6m、柱間寸法2.2~2.4m、廂の張り出しは2.5m、東西長7.6m、柱間寸法3.45m・4.15mである。なお、身舎の北柱列ではN2W2とN2W3の2基の柱穴が近接している。部分的な建て替えの可能性が考えられる。方向は東桁行でN-4°43'-Wである。柱穴掘り方は一辺100~120cmの方形で、残存する深さは60~110cmと偏りがある。柱痕跡は直径25~33cmの円形である。N1E1・N1W1・N2E1・N2W1・N2W3・N3W1で柱の切り取り痕跡が認められた。N1W2・N1E2・N3E1には切り取りが認められなかったが、切り取り穴が浅かったため確認できなかった可能性がある(註1)。なお、N2W2のみは柱痕跡が掘り



第15図 拡張区北壁断面図



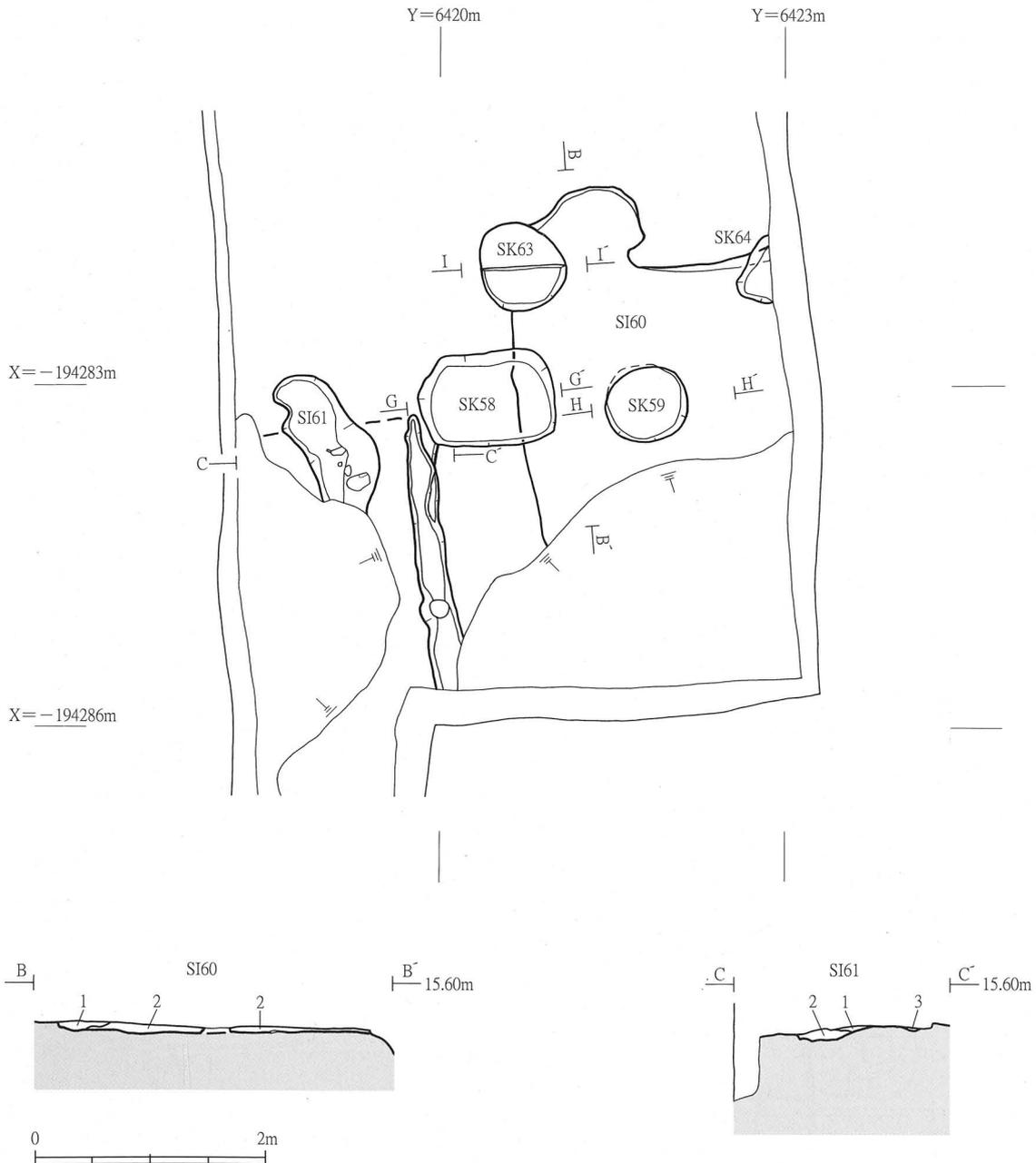
第16図 6区平面図

方の最下部で確認され、他の柱穴とは様相が異なっているので、切り取りではなく、抜き取られている可能性が高い。

遺物は土師器、赤焼土器、須恵器、瓦の破片が約40点出土した。N3E1の確認面から出土した土師器D-2高台付坏、N2W3の柱切取穴から出土した須恵器E-1坏が図化できた。

SI61・66、SK65、SX67に切られている。

SD56溝跡 擁壁のすぐ北側で確認した。やや蛇行しているため方向は明瞭ではないが、概ねE-4°-Nである。



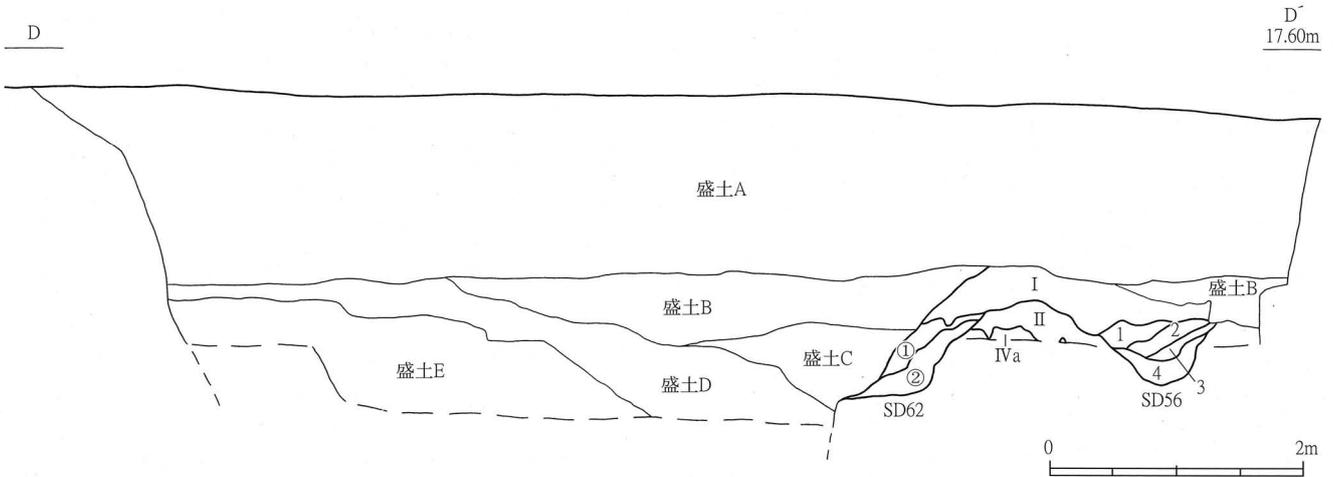
	層位	色調	性質	混入物・その他
SI60	1	10YR4/4 褐色	シルト	暗褐色シルトブロック (径5~15mm)・焼土ブロック (径10mm) を全体に含む
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトブロック (径5~10mm)・褐色シルトブロック (径5mm) を全体に含む
SI61	1	5YR4/8 赤褐色	シルト	焼土
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルト粒・黄褐色シルト粒を全体に含む
	3	10YR4/4 褐色	シルト	

第17図 SI60・61平面・断面図

上幅60cm、下幅20cm、深さ約50cm、断面形は上部が大きく開く「U」字形である。堆積土は自然堆積層である。

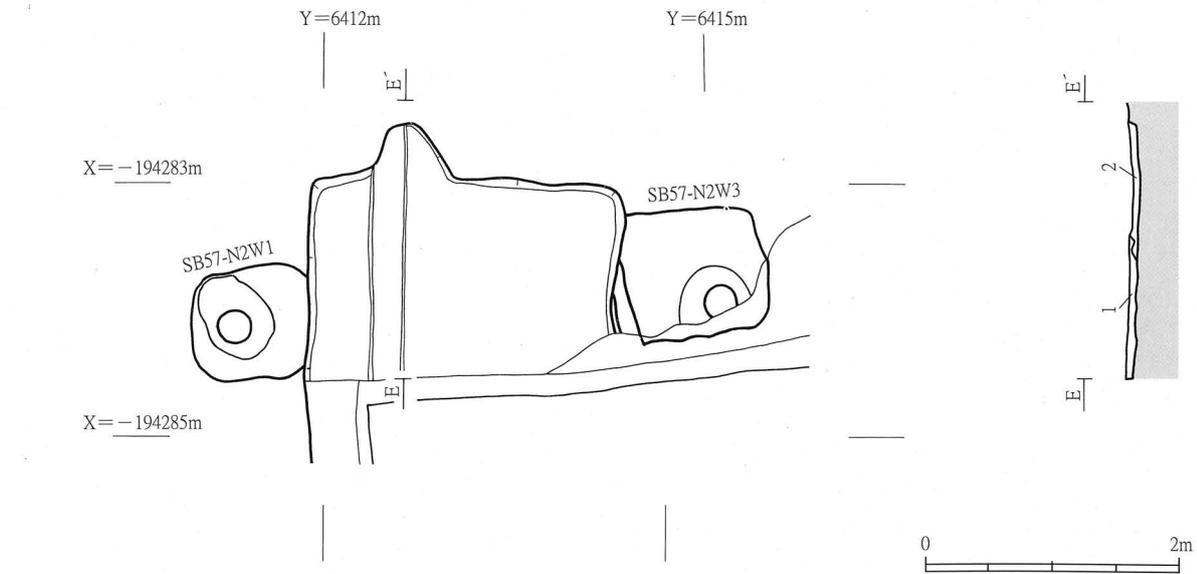
遺物は土師器、赤焼土器、瓦片が5点出土し、軒丸瓦1点が図化できた(第24図7)。

SD62溝跡 SD56の北側に並行している。方向は、概ねE-4°-Nである。北半部を削平されているため幅は不明であるが、上幅80cm以上と推定される。深さは約60cmで、底面は平坦である。北側の壁が失われているが、断面形は逆台形を呈すると考えられる。堆積土も大部分が失われているが自然堆積層と考えられる。



層位	色調	性質	混入物・その他	
盛土A	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂	礫多量	
盛土B	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量	
盛土C	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック多量	
盛土D	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量	
盛土E	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂	礫多量	
SD56	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土粒少量
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	礫(径50mm)少量
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土粒多量
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	木炭粒微量
SD62	①	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒微量
	②	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土粒微量

第18図 6区東壁断面図(1)



層位	色調	性質	混入物・その他	
SI66	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	木炭粒微量
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック少量、木炭粒少量

第19図 SI66平面・断面図

SK58土坑 調査区南部に位置する。東西1.2m、南北0.8mの楕円形である。深さは約10cm、壁は緩やかで、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。

土師器、赤焼土器、瓦片が11点出土している。

SI60を切っている。

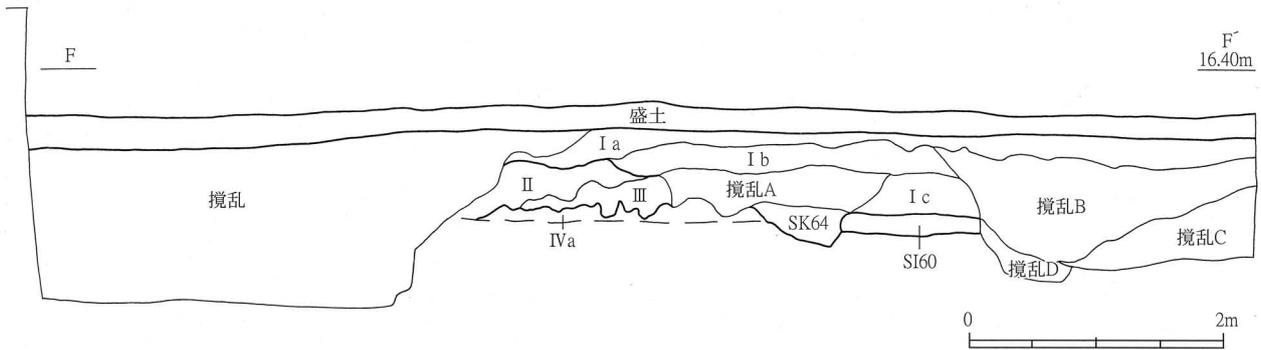
SK59土坑 調査区南部に位置する。直径70cmの円形で、深さは約30cm、壁は比較的急で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。

土師器、須恵器、瓦片、鉄製品が約40点出土している。

SI60を切っている。

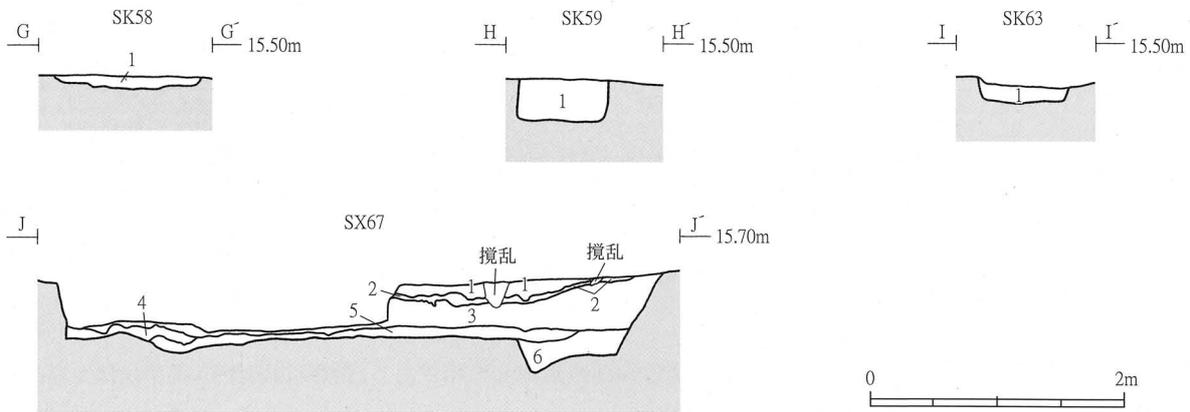
SK63土坑 調査区南部に位置する。直径70~75cmの円形で、深さは約20cm、壁は比較的急で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。

土師器、須恵器、瓦片が約40点出土している。



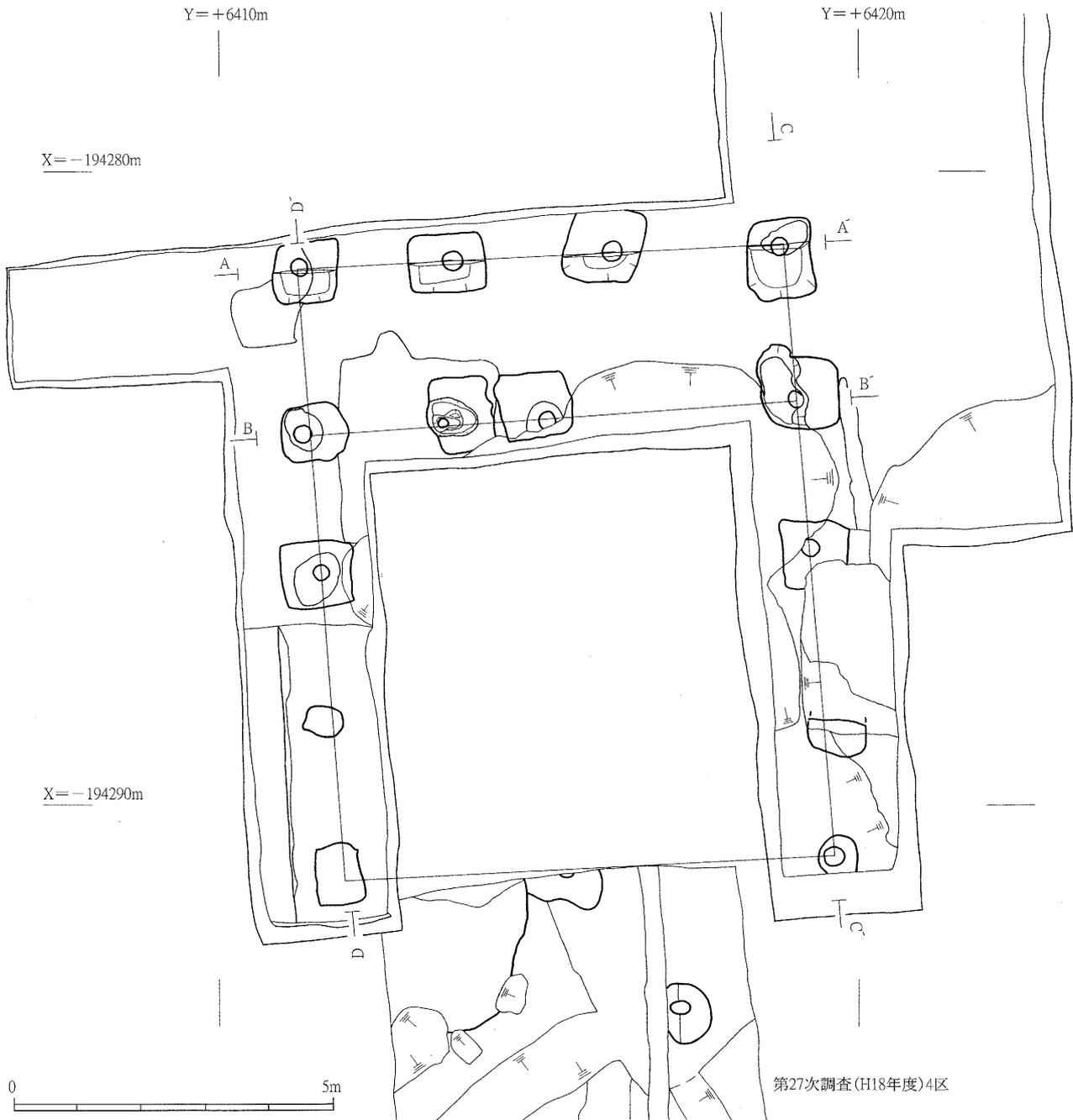
層位	色調	性質	混入物・その他
攪乱A	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	礫多量、もろい
攪乱B	10YR3/2 黒褐色	シルト	もろい
攪乱C	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック多量
攪乱D	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック少量
SK64	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5mm)多量、もろい

第20図 6区東壁断面図(2)



層位	色調	性質	混入物・その他	
SK58 1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色シルトブロック(径10mm)・褐色シルトブロック(径5~10mm)を全体に含む	
SK59 1	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色シルトブロック(径10~20mm)を全体に含む	
SK63 1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	褐色粘土ブロック(径20~30mm)少量、木炭粒・焼土粒少量	
SX67	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰粒少量
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	灰白色火山灰	暗褐色粘土質シルトブロック少量
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒微量
	4	10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR3/3 暗褐色	粘土 粘土	ブロック状に混合、しまりあり
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック(径5mm)少量、木炭粒・焼土粒微量
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック(径10~20mm)多量、木炭粒・焼土粒微量

第21図 SK58・59・63、SX67断面図



第22図 SB57平面図

SI60を切っている。

SK64土坑 調査区南東に位置し、大部分が調査区外のため詳細は不明である。深さは約20cm、堆積土は1層である。

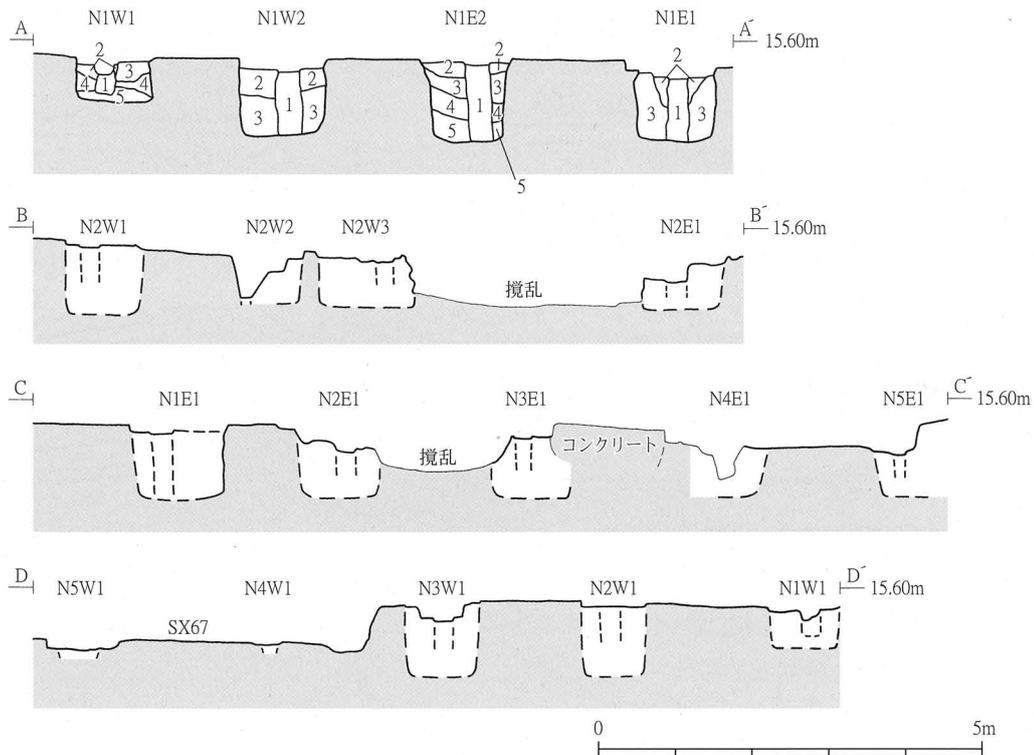
SI60を切っている。

SK65土坑 拡張区の北西部に位置する。東西1.1m、南北1mの不整な方形で、深さは約5cm、壁は比較的急で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。

土師器、瓦片が4点出土している。軒丸瓦1点が図化できた(第24図8)。

SB57-N1W1を切っている。

SK67性格不明遺構 拡張区の西部に位置するが、大部分が調査区外のため詳細は不明である。南北4.8m以上、深さ約50cm、北壁は比較的急に立ち上がり、底面には凹凸がある。堆積土は自然堆積層で、上部には灰白色火山灰



	層位	色調	性質	混入物・その他
N1W1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	やわらかい、柱痕跡
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック (径5~10mm) 少量、しまりなし、切取穴
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック (径20~30mm) 少量、しまりあり、掘り方埋土
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック (径10~20mm) 少量、しまりあり、掘り方埋土
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック (径30~50mm) 少量、しまりあり、掘り方埋土
N1W2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒少量、やわらかい、柱痕跡
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR3/2 黒褐色	粘土 } 互層	黒褐色粘土ブロック (径10~20mm) 少量 にぶい黄褐色粘土ブロック (径10~20mm) 少量 } しまりあり、掘り方埋土
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック (径20~30mm) 少量、しまりあり、掘り方埋土
N1E2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒微量、やわらかい、柱痕跡
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック (径30~80mm) 多量、礫少量、しまりあり、掘り方埋土
	3	10YR4/4 褐色	粘土	暗褐色粘土粒微量、しまりあり、掘り方埋土
	4	10YR2/3 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径30mm) 少量、しまりあり、掘り方埋土
	5	10YR2/2 黒褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック (径10mm) 少量、しまりあり、掘り方埋土
N1E1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土粒少量、やわらかい、柱痕跡
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径5~10mm) 少量、切取穴埋土
	3	10YR2/3 黒褐色 10YR4/4 褐色	粘土 } 互層	褐色粘土ブロック (径10~30mm) 少量 黒褐色粘土ブロック (径30mm) 少量 } しまりあり、掘り方埋土

第23図 SB57断面図

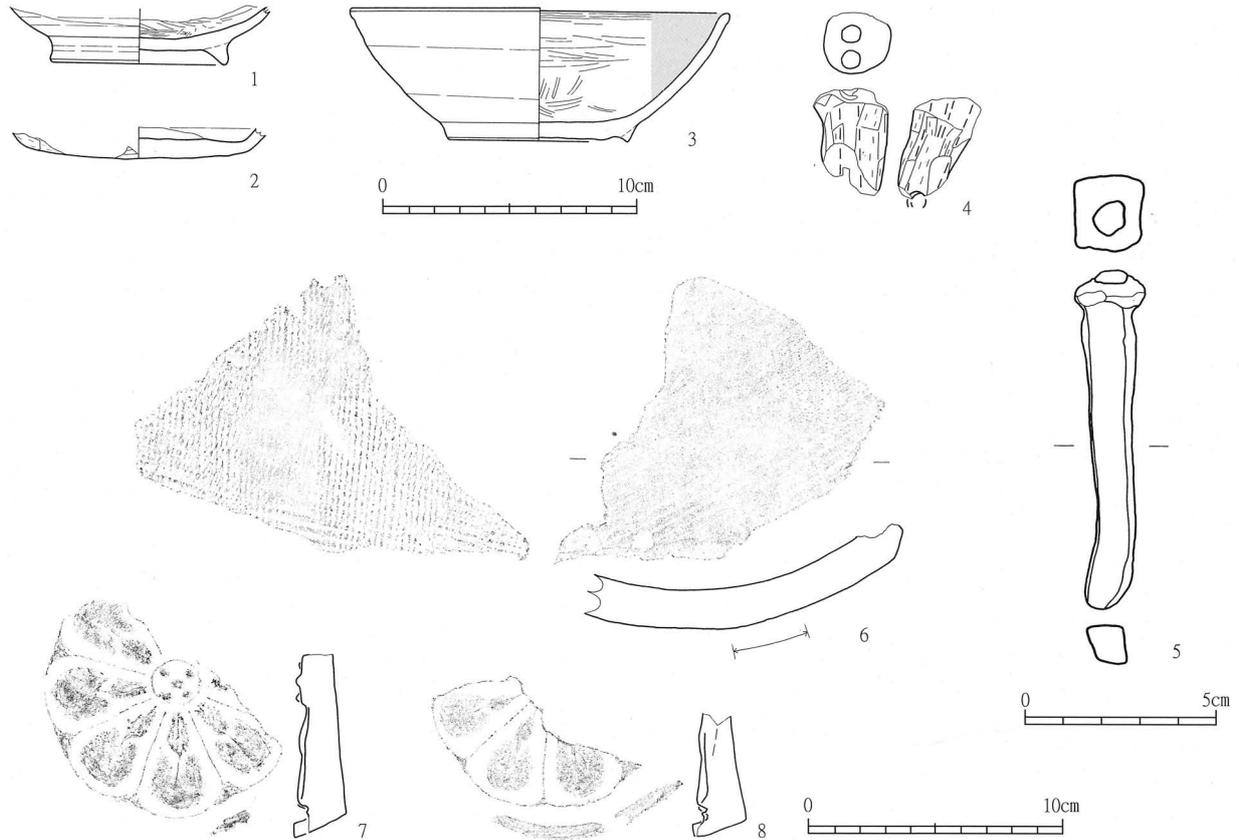
層が認められた。

遺物は土師器、赤焼土器、須恵器、瓦片が約300点出土している。瓦の中には砥石に転用された破片も認められた (第24図6)。

SB57-N4W1・N5W1を切っている。

4. まとめ

昨年度の5区で確認したSD32との位置関係からすると、その延長部分に位置するのはSD56である。ただし、SD56はSD32と比べて規模がやや小さく、断面形も異なっていること、一方、SD56の北側に並行するSD62は、北半部が失われているが断面形がSD32と同じく逆台形と推定され、規模も同様の可能性がある。SD32との関係については今後も検証を重ねていく必要がある。

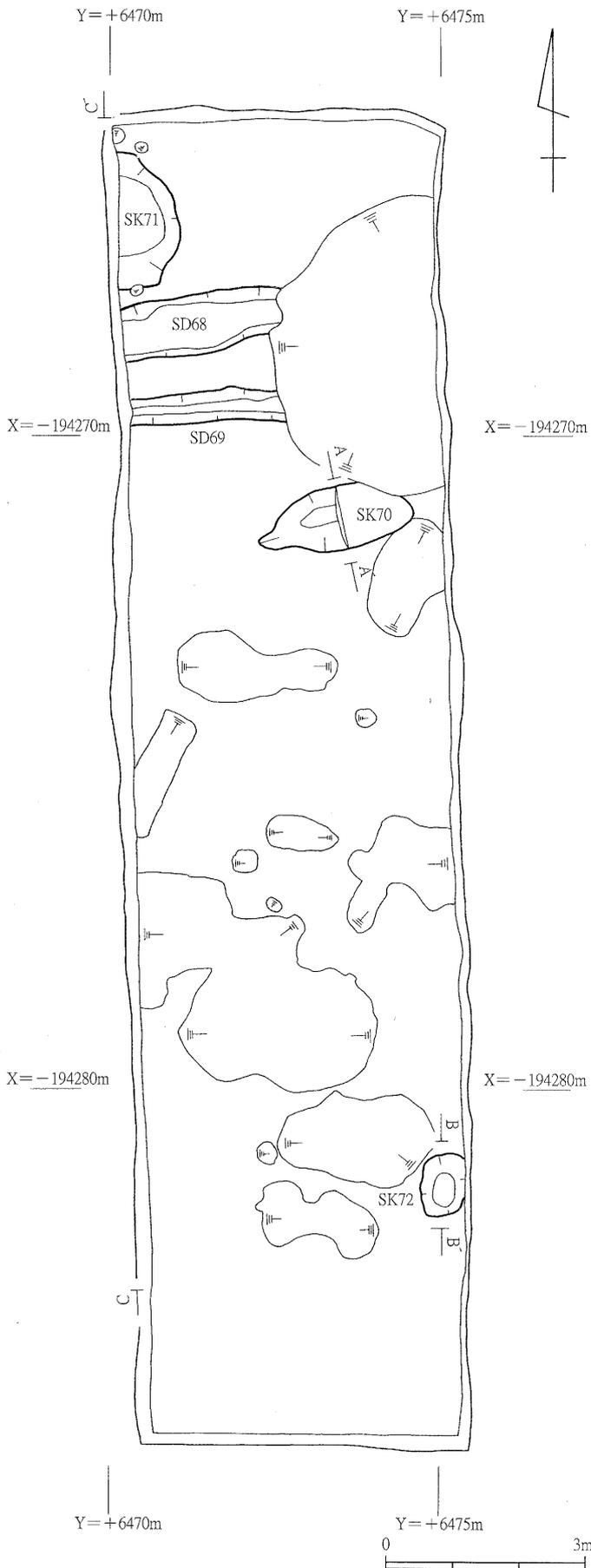


No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別・器種	遺存度	法量 (cm)			調整・特徴	写真 図版
					口径	底径	器高		
1	D-2	6区・SB57-N3E1・確認面	土師器・高台付 坏	底部のみ	不明	6.8	不明	ロクロ調整、底部回転糸切り、付高台、内面ヘラミガキ、白針なし	11-1
2	E-1	6区・SB57-N2W3・切取穴	須恵器・坏	底部のみ	不明	8.8	不明	外面ヘラケズリ→ヘラナデ、内面ロクロナデ、底部ヘラケズリ、白針なし	11-2
3	D-1	6区・SI61・カマド	土師器・高台付 坏	1/4	(14.8)	7.0	5.2	ロクロ調整、底部回転糸切り、付高台、内面ヘラミガキ・黒色処理、白針少量、口縁部にタール状の付着物	11-3
No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	法量 (cm)			特徴	写真 図版
4	P-1	6区・SI60	土製品・脚部?	不明	長さ	幅	厚さ		
5	Na-1	6区・SI60	鉄製品・釘	ほぼ完形	4.2	2.9~1.9	-	ヘラケズリ、ナデ、孔径0.7cm	11-4
6	G-12	6区・SX67	平瓦	1/5	8.9	1.4	1.0	47.6g	11-5
No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	調整・特徴			色調	写真 図版
7	F-8	6区・SK65	軒丸瓦	瓦当面3/4	凸面：縄叩き、凹面：布目痕、糸切痕、凸面を砥石に転用・磨滅、厚27mm			にぶい黄橙	11-6
8	F-7	6区・SD56	軒丸瓦	瓦当面1/4	八葉重弁蓮華文 (国分寺第1類)、白針なし			褐灰	11-7
					八葉重弁蓮華文、白針なし			灰白	11-8

第24図 6区出土遺物

遺構・層位	土師器		須恵器		赤焼土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
SD56	1	2			2	6	2	799					
SK58	1	8			7	22	3	459					
SK59	15	69	5	70			6	1,000				15	
SK63	35	98	2	7			2	442					
SK65	2	2					2	1,390					
SI 60	45	150	11	144	194	249	13	2,587				4	
SI 61	123	534	13	66	43	114	48	2,315				2	
SI 66	75	288	3	21	9	12	6	510					
SB57	29	125	5	82			12	2,108					
SX67	169	858	30	464	40	44	58	6,669					
I層・攪乱	370	1,179	47	545	138	262	373	22,671	56	40	1	42	土師質土器19、近世瓦101
計	865	3,313	116	1,399	433	709	525	40,950	56	40	1	63	土師質土器19、近世瓦101

表8 6区遺物集計表



第25図 7区平面図

SB57は寺地北東部で初めて確認された掘立柱建物跡である。建物の構造に関しては、総柱の建物になる可能性や、さらに南側に1間延びる可能性も指摘されている(註2)。建物内部の未調査部分や昨年度の4区の東西両側などの調査も含めて、今後も検証していく必要がある。

竪穴住居跡は3軒確認した。南に隣接する昨年度の4区でも3軒確認しているのでこの付近は竪穴住居跡が集中する区域と考えられる。ただし、昨年度4区のSI38は国分寺創建期頃と考えられたが、今年度確認した竪穴住居跡の遺物には赤焼土器が多く含まれていることから、年代的には隔たりがある。

(註1) 拡張区北壁の断面観察では、旧表土と考えられるⅢ層が部分的ながらも約30cmの厚さで残存し、SB57のN1E2の柱穴がこのⅢ層上面から掘り込まれている状況を確認している。従ってこれらの柱穴は上部を30cm前後削平されていると考えられ、浅い切り取り穴は削平されている可能性がある。

(註2) 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会の現地指導及び指導委員会

VIII. 7区の調査

1. 調査の概要

7区は6区の東側約50mの位置に設定した。調査区は東西幅5m×南北長20mである。全体的に攪乱が深く、遺構の遺存状況はよくない。

2. 基本層序

I～IV層を確認し、I層はIa～Ie層、II層はIIa・IIb層に細分した。

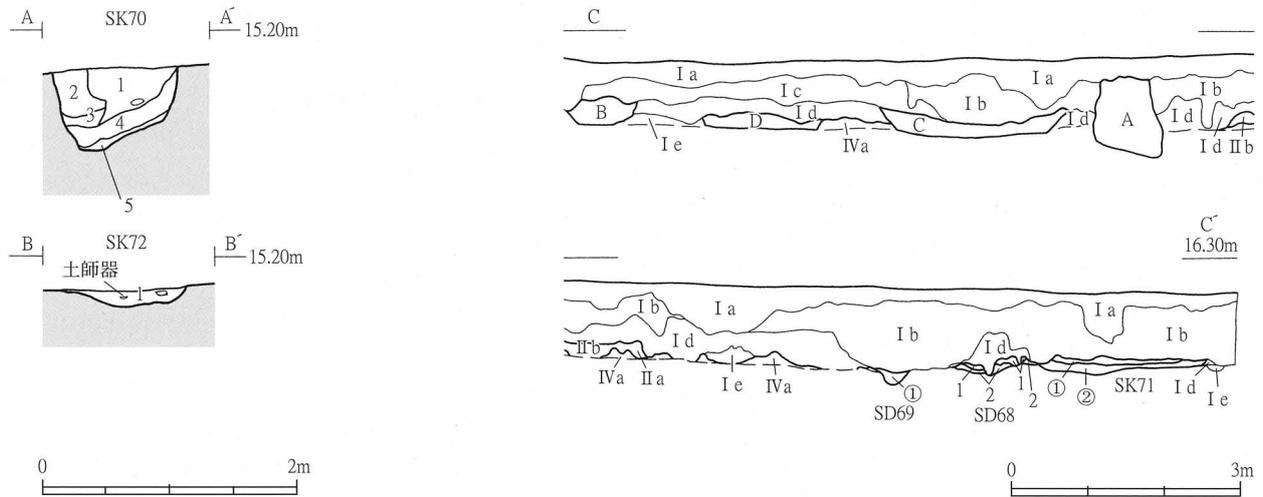
3. 遺構と遺物

確認したのは溝跡2条、土坑3基である。

SD68溝跡 調査区北側に位置する。確認した長さが約2.5mと短いため方向は明瞭ではないが、概ねE-8°-Nである。上幅70~90cm、下幅30~60cm、深さ約15cmで、底面はやや凹凸がある。断面形は皿形で上部が大きく開く。堆積土は2

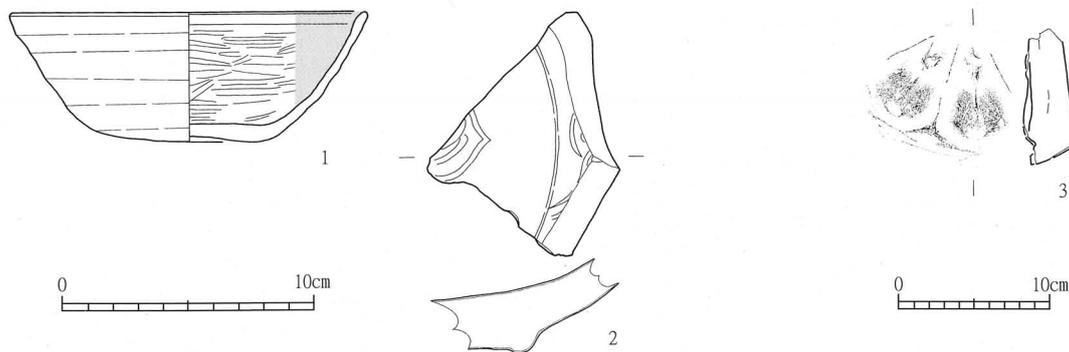
層で自然堆積層である。

SD69溝跡 SD68の南側に並行している。確認した長さが約2.3mと短いため方向は明瞭ではないが、概ねE-4°-Nである。上幅40~50cm、下幅10~20cm、深さは約20cmで、底面は平坦である。断面形は浅い「U」字形で、堆



	層位	色調	性質	混入物・その他
SK70	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	黒褐色シルトを斑状に含む
	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	暗褐色粘土粒少量
	4	10YR2/2 黒褐色	シルト	暗褐色粘土を斑状に含む
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	黒褐色粘土を斑状に含む
SK72	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	木炭粒微量
	A	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土ブロック多量、もろい
	B	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	褐色粘土ブロック少量
	C	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土ブロック少量、木炭粒少量
SD69	D	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	礫多量、もろい
	①	10YR3/3 暗褐色	粘土	
SD68	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	褐色粘土粒多量
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土	褐色粘土粒微量
SK71	①	10YR2/3 黒褐色	粘土	
	②	10YR2/2 黒褐色	粘土	褐色粘土粒微量

第26図 7区西壁、SK70・72断面図



No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別・器種	遺存度	法量 (cm)			調整・特徴	写真図版
					口径	底径	器高		
1	D-3	7区・SK72	土師器・杯	4/5	14.0	5.0	5.2	ロクロ調整、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ・黒色処理、白針微量、底径/口径0.36	11-10
2	J-1	7区・カクラン	青磁(龍泉窯系)・盤	小片	不明	(14.8)	不明	見込みに印花文	11-11
No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別	遺存度	調整・特徴			色調	写真図版
3	F-9	7区・カクラン	軒丸瓦	小片	八葉重弁蓮華文、白針なし、裏面を砥石に転用・磨滅			灰	11-9

第27図 7区出土遺物

積土は1層である。

SK70土坑 調査区北部に位置する。東西2.3m、南北0.9mの楕円形である。深さは65cmで、壁は垂直に近い。底面は北に向かって傾斜している。堆積土は黒褐色シルトを主体とした自然堆積層である。堆積土の様相は昨年度2区で確認したSK20のような縄文時代の落とし穴に類似するが年代や性格は確定できなかった。

SK71土坑 調査区北西部に位置する。南北2.1mの円形と推定されるが、西半部が調査区外のため詳細は不明である。深さは15～20cm、壁は緩やかで、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層で自然堆積層と推定される。

土師器片が1点出土している。

SK72土坑 調査区南東部に位置する。東西0.6m、南北1mの楕円形である。深さは15cm、壁は緩やかで、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。

土師器などの破片が約80点、廃棄された状態で確認された。図化できたのはD-3坑（第27図1）である。

その他の出土遺物

攪乱中から龍泉窯系青磁J-1盤（第27図2）、F-9軒丸瓦（第27図3）などが出土している。

4. まとめ

調査区北部で確認されたSD68とSD69は、位置関係からすると6区のSD62・SD56溝跡の延長部分である可能性が考えられたが、上部が削平されており遺存状態が良くなかったため断定はできなかった。6区の項で述べたように、SD32とSD62・56の関係はそれぞれの規模や断面形が一致しないなどの問題点があることから、今後も検証を重ねていく必要がある。



SD68・69溝跡確認状況

遺構・層位	土師器		須恵器		土師質土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
SK71	1	4											
SK72	74	507					1	481				2	
I層、攪乱	53	780	4	45	2	156	87	13,686	11	33		1	近世瓦10
計	128	1,291	4	45	2	156	88	14,167	11	33	0	3	近世瓦10

表9 7区遺物集計表



1. 2区全景 (南から)



2. 3区全景 (南から)



3. 3区SF45断面 (西から)

写真図版1 2・3区



1. 4区全景 (北から)



2. SF49 (東から)



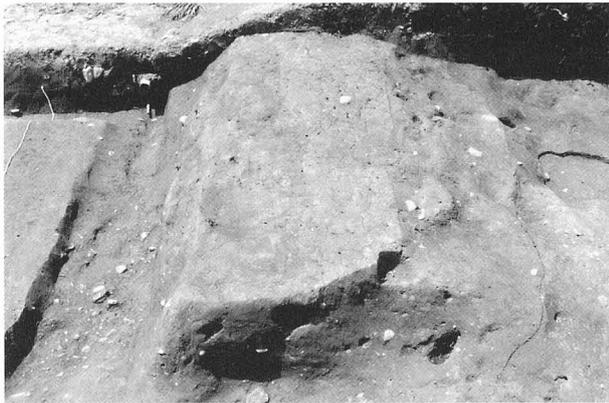
3. SF49南側の立ち上がり



4. SF49断面 (調査区西壁)



1. 西部全景（東から）



2. SF49（西端部、東から）



3. SF49断面（東から）



4. SF49（中央部確認状況、東から）



5. SF49（中央部検出状況、東から）



1. SF49 (中央部、西から)



2. SB51 (東から)



3. SB51-E3断面



4. SB51-E2断面



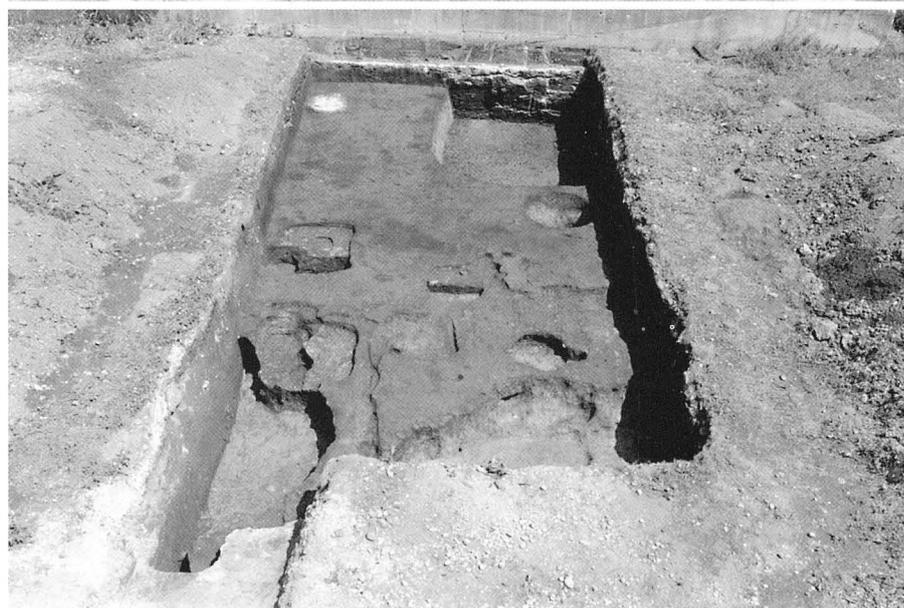
5. SB51-E1断面



1. 北半部全景（北から）



2. SD62(左)、SD56(右)完掘状況
(西から)



3. 南半部全景（拡張以前、南から）

写真図版 5 6区 (1)



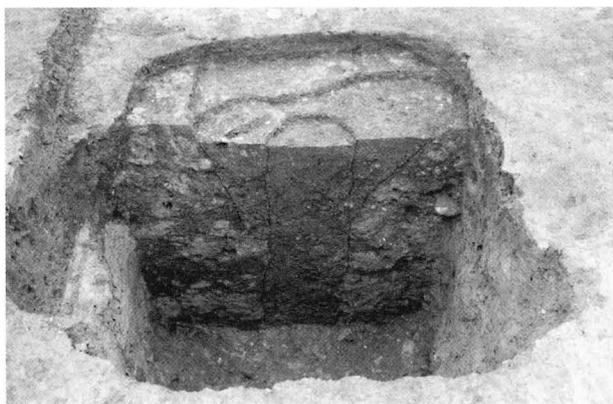
1. SI60 (南から)



2. SB57 (東から)



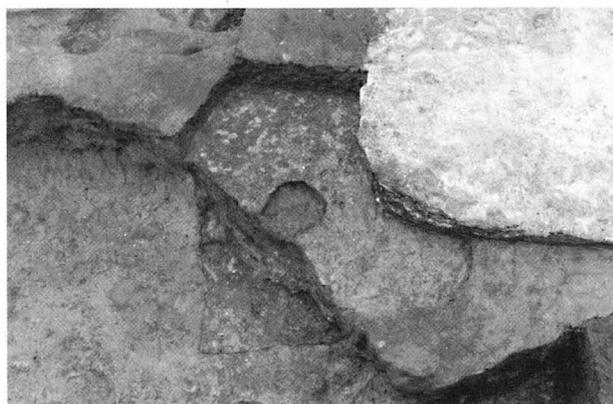
3. SB57 (北から)



1. SB57-N1E1断面



2. SB57-N2E1



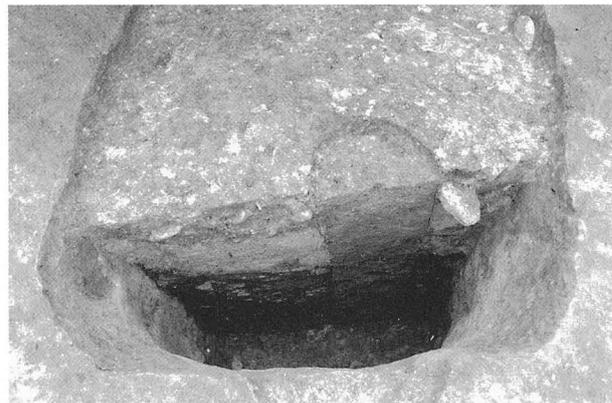
3. SB57-N3E1



4. SB57-N5E1



5. SB57-N1W2断面



6. SB57-N1E2断面



7. SB57-N1W1断面



8. SB57-N2W1

写真図版7 6区(3)



1. SB57-N3W1



2. SB57-N4W1



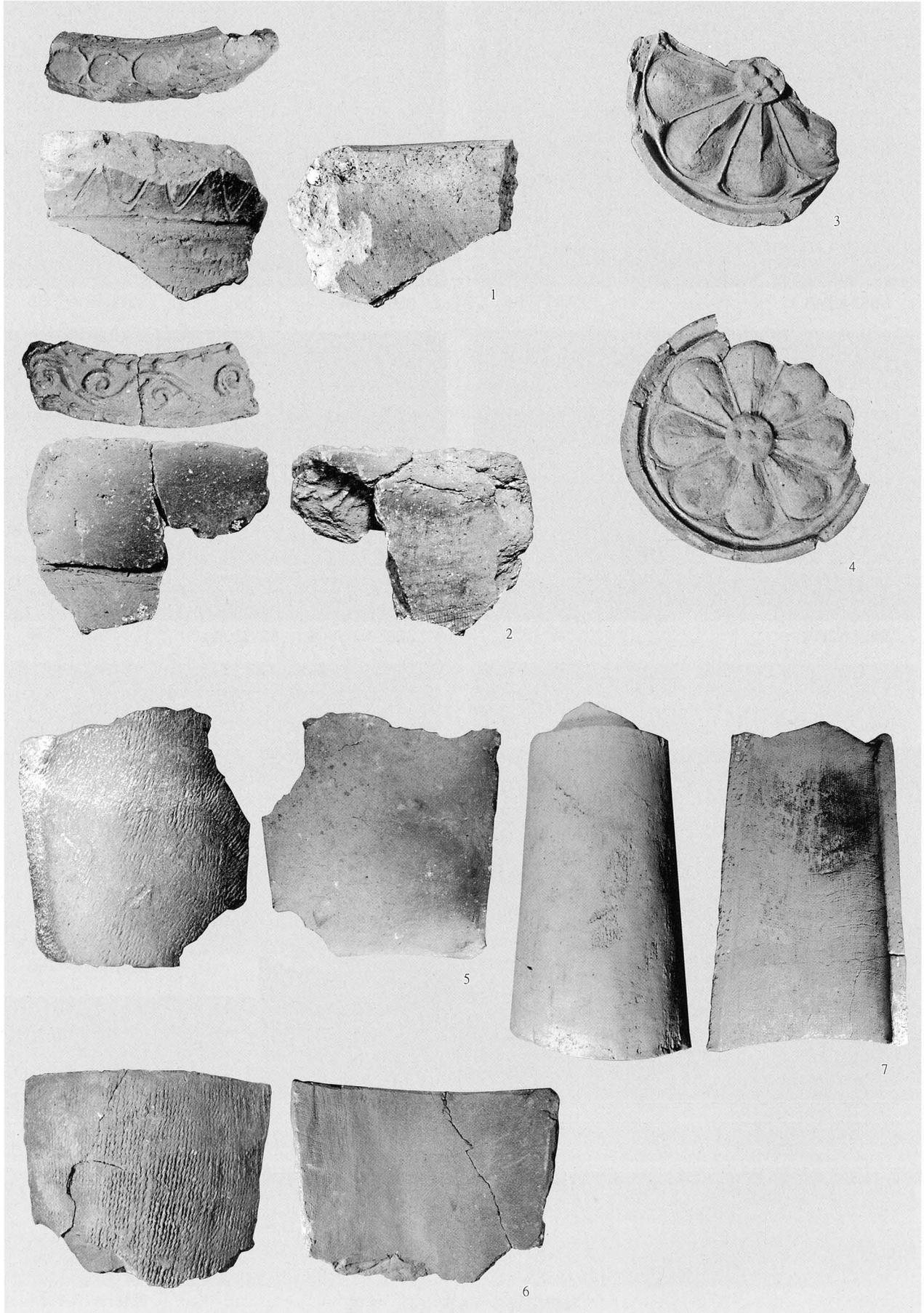
3. SB57-N2W3



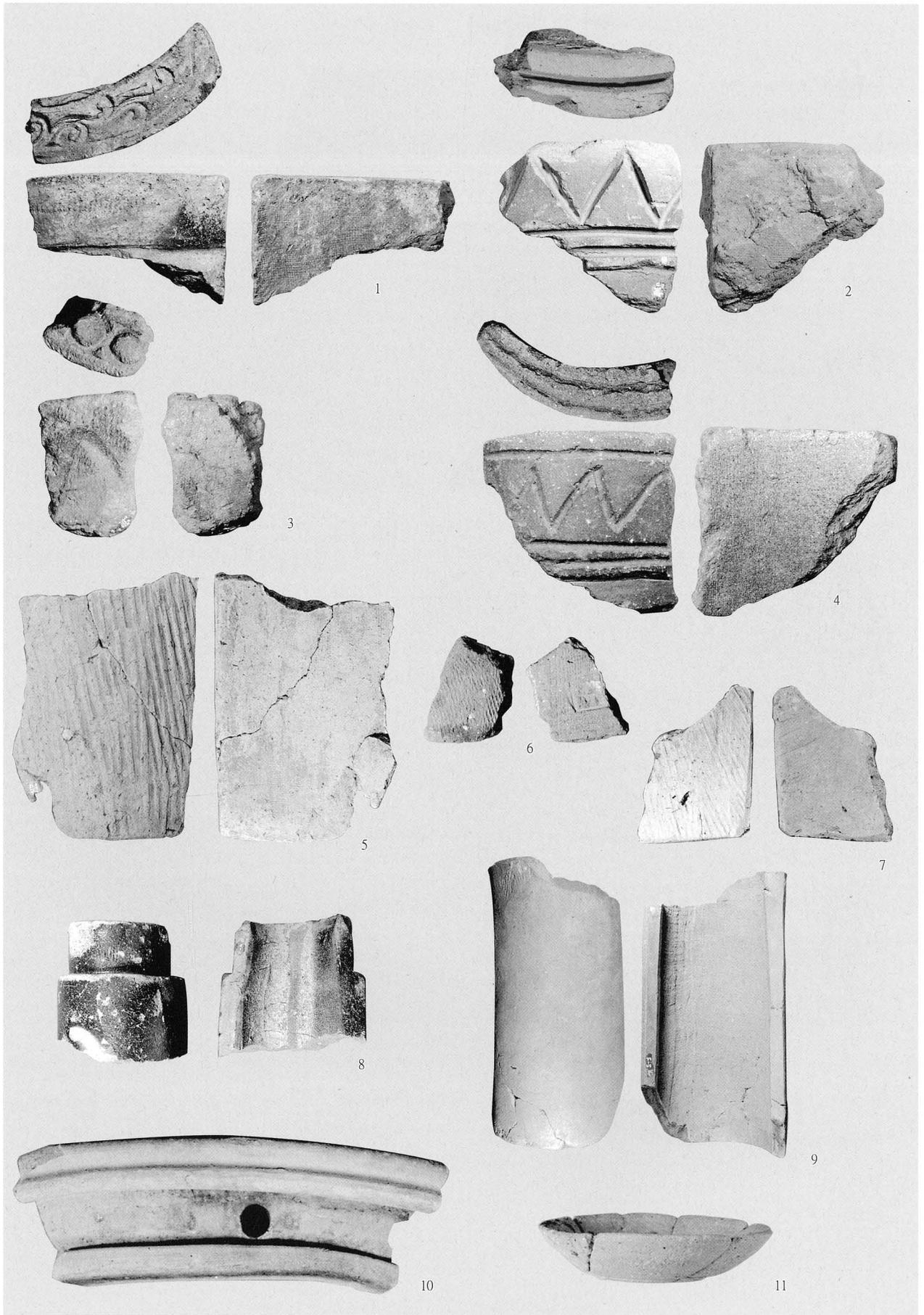
4. SB57-N2W3(左)、N2W2(右)



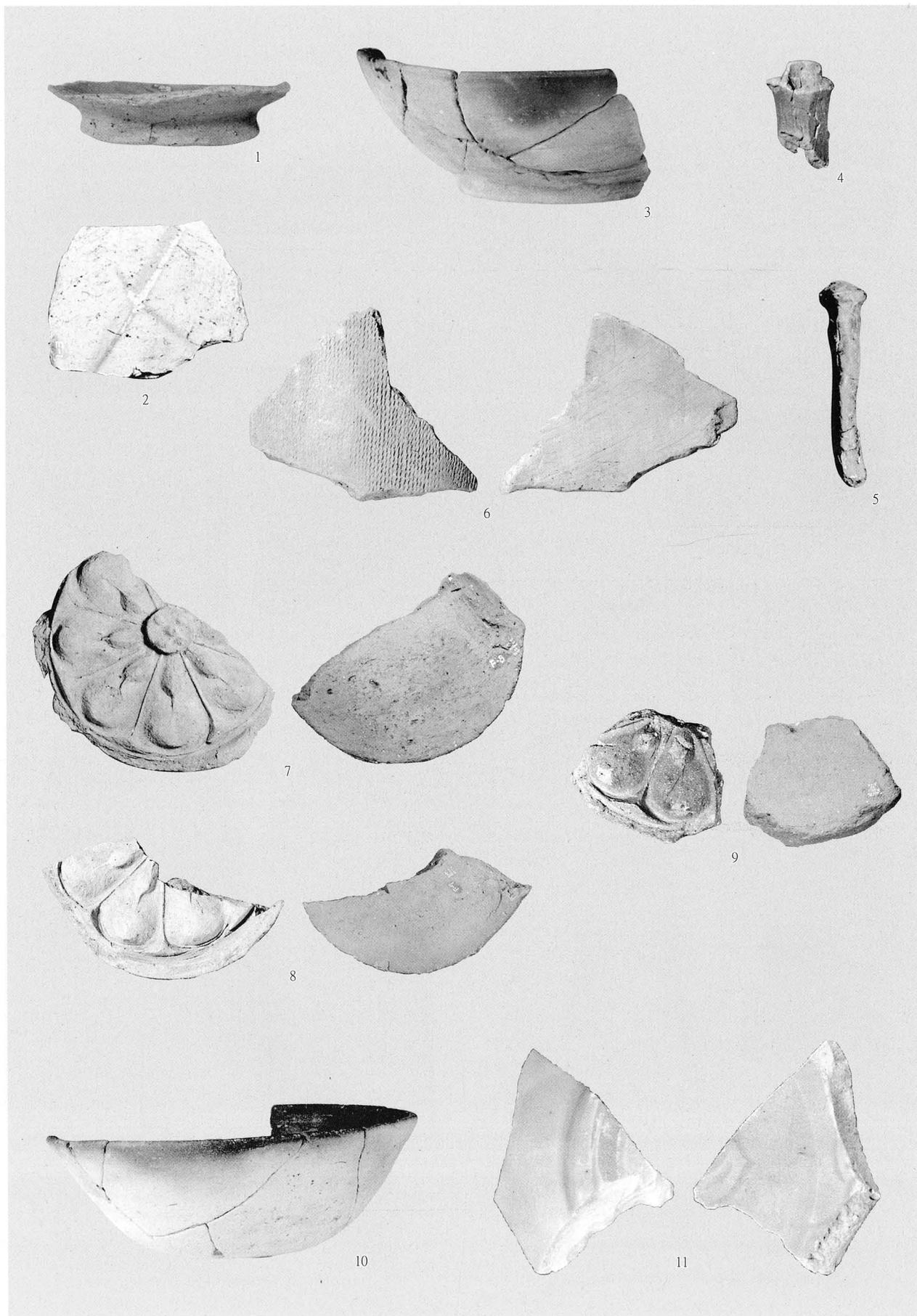
5. 7区全景 (北から)



写真図版9 2・4区出土遺物



写真图版10 5区出土遺物



写真図版11 6・7区出土遺物

第3章 砂押古墳

1. 調査経過

砂押古墳は仙台市太白区砂押町125-10にあり、仙台駅から南西に約4kmに位置している。丘陵の南東斜面にあり、南には名取川によって形成された沖積地が広がっている。墳丘部は南側の周溝部より比高差にして5m程高くなっている。北側の住宅地の路面からも1.7m程高くなっている。昭和57年に周溝部分を中心に発掘調査が実施され、周溝が南側に巡っていることが確認された。また埴輪や土器が出土し、古墳の築造年代は5世紀後半から6世紀前半と考えられた。

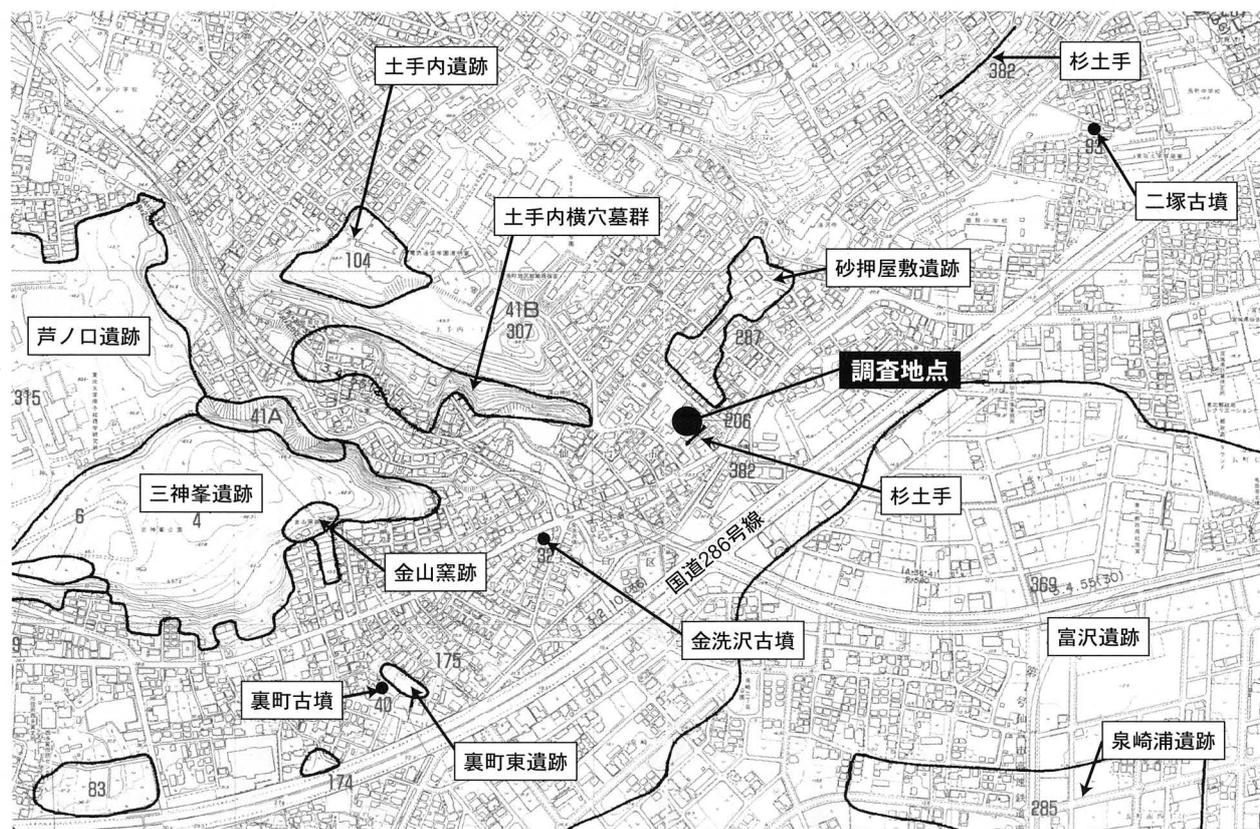
今回の調査は、平成19年6月4日付けで、個人住宅建築と切り土を伴う擁壁工事の「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な保存についての協議を行うとした。なお平成19年6月8日付けで、同工事に伴う発掘届も提出されたので、同様に確認調査を実施し、その上で必要な保存についての協議を行うとしたものである。

調査は墳丘部と周溝部の確認調査を、平成19年7月9日から8月10日まで実施し、墳丘部で発見された箱式石棺のみの調査を8月23日から30日まで実施した。調査された面積は、200㎡である。

2. 調査方法と基本層序

今回調査するにあたり、測量調査を実施し現況の平面図を作成した。伐木後の現地を観察すると、墳丘の形態が西に前方部のある前方後円墳の可能性も考えられた。墳丘の形態と主体部（埋葬施設）の確認を目的に、墳丘を横断する調査区（A、B、Cトレンチ）を設定した。

表土は墳丘頂部で2cmから15cm、周溝付近で10cm程となっている。表土下は古墳の積土、あるいは墳丘の崩壊土、地山となっている。



第28図 砂押古墳位置図

3. 発見された遺構・遺物

(1) 墳丘部

墳丘中央部より2基の埋葬施設を発見した。古墳のほぼ中央より板状の石を組んだ「箱式石棺」と、やや南に寄った地点から河原石を積み上げた「礫槨」である。ともに蓋石が失われているため、上部は削平されていると考えられる。本来は墳丘がもう少し高かったと見られる。埋葬施設の中には遺骸や遺物等は残存していなかった。

箱式石棺は、長さ1.85m、幅0.45m、深さ0.25mあり、側壁は安山岩を立て、底面は凝灰岩を切石状に加工して敷いている。極めて丁寧な造作で、底面の切石間の継ぎ目や側壁との間には隙間がないほどである。堆積している土の大部分は墳丘部に積まれた土が崩落して入り込んだと考えられるが、底面付近に厚さ1～2cm程の粘土の堆積が認められた。埋葬に関わるものが粘土化したのか、雨水の流入により粘土質の土が堆積したのかは不明である。底面付近には赤彩された痕跡が残されていた。副葬した遺物は発見されなかった。

礫槨は、長さ3.2m、幅0.8～0.95m、深さ0.2mあり、河原石を小口積みという手法で積み上げて石室としている。箱式石棺と同様に上部は削平されているが、全体としての平面形は良く保たれている。堆積土の観察からは木質の棺の痕跡などは見られなかった。副葬した遺物も発見されなかった。

両施設とも石材の組み方や墳丘への設置方法についての追加調査が必要である。

墳丘下部で旧表土を検出している。古墳構築時の表土と見られ、標高27.5mから28.6mに厚さ0.2～0.4mで観察される。それより上部の2.8m分は盛られた土であり、それより下部は削り出され成形されていると考えられる。墳丘上部より埴輪片が出土している。

古墳西側の前方後円墳の前方部のように見られた箇所は、周辺での工事残土が平場状に集積されたものであった。また調査区Cトレンチで墳丘裾部となる段差を確認したことから、形状よりこの古墳は円墳と考えられる。

(2) 周溝部

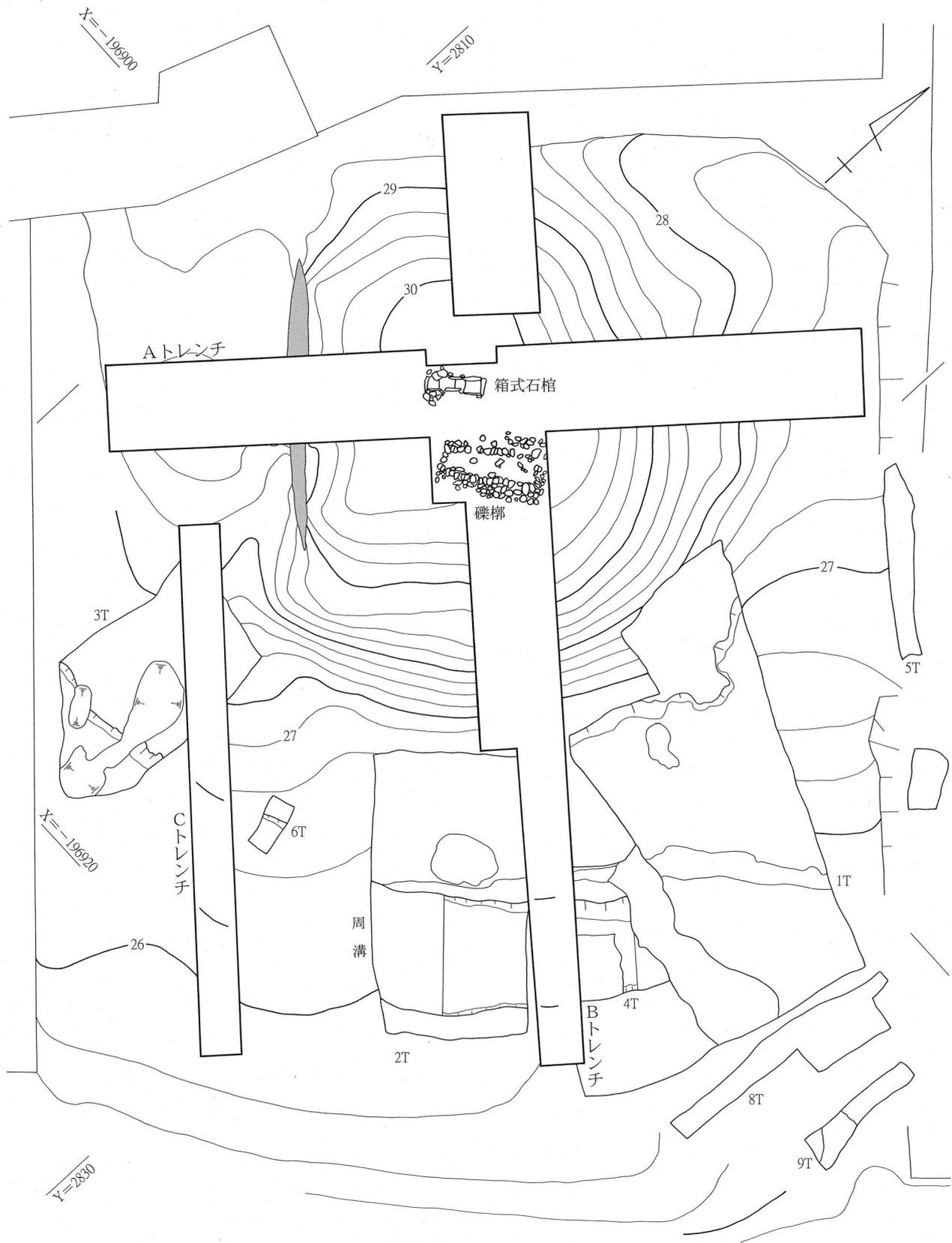
昭和57年に発掘調査されなかった箇所では、幅3.7m、深さ0.2mの周溝部を検出した。堆積土中より埴輪片が出土している。周溝は南にのみ存在する可能性もあるが、全周の場合は直径42mになると推定される。

4. まとめ

古墳の形状は円墳であることが明らかになった。周溝底面より墳丘残存上部までの高さは5m程で、検出された墳丘裾部から直径25mの墳丘である。周溝との間に幅4.5～5mの平場が存在する古墳のようである。出土遺物は埴輪以外になく、築造された年代をこれまでより絞り込むことは出来なかった。

埋葬施設が2基ある例は、会津大塚山古墳や遠見塚古墳などで見られる例である。今回のような箱式石棺と礫槨が存在する例は台町古墳群（丸森町）で確認されている。周辺の古墳と比較検討すると、東に存在した一塚古墳（太白区鹿野）では竪穴式石室の中に内部が刳り抜かれた石棺があり、中から鏡や玉類が出土した。二塚古墳（同鹿野）でも遺物は出土していないが、同様の刳り抜かれた石棺が出土している。これらから見ると本古墳の箱式石棺は埋葬施設としてはやや小型化した観がある。また西に存在した裏町古墳（太白区西多賀）では礫槨が発見され、内部から鏡が出土していた。今回検出した礫槨と構造的にはよく似ている。盗掘された痕跡が明瞭な裏町古墳に較べれば残存状況は良好なものである。

今回の調査では、埋葬施設からの出土遺物がなかったため、年代や埋葬者の階層などを特定することは出来なかった。構造解明のための本調査が必要と考えられる。



第29図 砂押古墳平面図 (Tは昭和56年度調査) ■ 擁壁



墳丘全景（西より）



箱式石棺（西より）



礫檣（西より）

写真図版12 砂押古墳

第4章 総括

1. 陸奥国分寺跡

(1) 伽藍地南辺の調査

南辺の西部には1区～3区を設定した。1区は伽藍地の推定南西コーナーに設定したが、全面攪乱のため遺構は残存していなかった。2区と3区も攪乱を受けている箇所が多く、遺構は部分的に残存するのみであったが、SF45築地塀跡（掘り込み地業跡）とSD1溝跡、土坑などを確認できた。

南辺の東部には、南大門跡の東側に4区、南大門跡から約70m東側に5区を設定した。4区では、第19次調査（昭和58年度調査）のSF-1築地塀跡（SF49築地塀跡に改称）、SD-2溝跡（SD50溝跡と改称）を再検出した。5区では、SF49築地塀跡の他にSB51掘立柱建物跡なども確認している。

SF49は東西方向の掘り込み地業跡と、その上に積まれた築地塀跡からなる。築地塀跡は4区・5区共に遺存状況は良くなかったが、部分的ながらも築地塀の立ち上がりと考えられる箇所を確認できた。築地塀に係わる施設として、築地塀よりも約30cm外側の概ね対称位置にある柱穴は、築地塀構築の際に堰板を押さえた添柱の柱穴である可能性が考えられた。部分的に確認できた塀の立ち上がりや、添柱と推定されるピットなどから推定される築地塀の下端幅は約2.5m（8.5尺）である。掘り込み地業跡は比較的遺存状態のよい5区西部の状況からすると、幅3.4～3.5mの溝状で、深さは50～55cmと考えられた。版築層は褐色粘土ブロックを含んだ暗褐色や黒褐色の粘土が硬く叩き締められている。

昨年度の第27次調査1区と今年度の2・3区において南辺西半部のSF45築地塀跡とSD1溝跡、今年度の4・5区において南辺東部のSF49築地塀跡の位置を確認し、それぞれの座標値を明らかにすることができた。昨年度の1区内におけるSF45とSD1の方向は概ねE-6°-Nであったが、今年度の2区の調査成果と総合すると、南辺の西部における方位はE-4°36'～37'-Nである。今年度の4・5区の調査結果による南辺の東部における方位は、E-4°23'-Nであるので、南辺全体が一直線に設計・施工されていると見て問題はないと考えられる。現段階における南辺の方位についてはE-4°20'～40'-Nと考えられる。

なお、今回の4区の調査と平成17年度の南大門跡の調査結果を総合することにより、南辺東部の築地塀跡と南大門跡との位置関係も明らかとなった（第30図）。

(2) 寺地北東部の調査

寺地の北東部では、昨年度の4区の北側に6区、6区の東側約50mに7区を設定した。主要な目的は、昨年度の5区で確認した東西方向のSD32溝跡の性格究明である。

SD32の延長線上では、6区でSD56とSD62、7区ではSD68・SD69を確認したが、残存状態が悪く、SD32との関係を明らかにすることはできなかった。SD32については今後も検証を重ねていく必要がある。

6区のSB57掘立柱建物跡は、内部の柱穴配置から部分的な建て替えの可能性が考えられたが、攪乱等で確認できなかった柱穴もあり、詳細を明らかにすることはできなかった。今後も継続調査が必要であろう。

竪穴住居跡は3軒確認した。南に隣接する昨年度の4区でも3軒確認しているのでこの付近は竪穴住居跡が集中する区域と考えられる。ただし、昨年度4区のSI38は国分寺創建期頃と考えられたが、今年度確認した竪穴住居跡の遺物には赤焼土器が含まれていることから、年代的には隔たりがある。竪穴住居跡の時期別の分布状況についても今後の継続調査が必要と考えられる。

2. 砂押古墳

砂押古墳の墳形はこれまで明確ではなかったが、今回の調査によって直径25mの円墳であることが明らかとなった。周溝も含めた直径は40m以上になる可能性もある。埋葬施設は「箱式石棺」と「礫郭」の異なる形式の2基が

発見されたが、埋葬施設からの出土遺物がなかったため年代や被葬者の階層などは特定できなかった。今回は部分的な確認調査に留めたが、墳丘全体を対象とした継続調査が必要と考えられる。

引用・参考文献

1. 仙台市 1995『仙台市史 特別編2 考古資料』
2. 仙台市教育委員会 1973「史跡陸奥国分寺跡環境整備予備調査（塔院廻廊跡）発掘調査説明会資料」
3. 仙台市教育委員会 1974「史跡陸奥国分寺跡 昭和48年度環境整備予備調査概報」
4. 仙台市教育委員会 1975「史跡陸奥国分寺跡環境整備予備調査略報」
5. 仙台市教育委員会 1976「陸奥国分寺跡・西南地域発掘調査報告」
6. 仙台市教育委員会 1978「陸奥国分寺跡 緊急発掘調査概報」
7. 仙台市教育委員会 1979「史跡陸奥国分寺跡西南部発掘調査略報」
8. 仙台市教育委員会 1980「陸奥国分寺跡発掘調査報告 一宗教法人陸奥国分寺の位牌堂建設に伴う遺構確認調査一」『年報Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第23集
9. 仙台市教育委員会 1980「陸奥国分寺跡西側寺域線試掘調査報告 昭和54年度」
10. 仙台市教育委員会 1981『史跡陸奥国分寺跡 昭和55年度環境整備予備調査概報 東門跡』仙台市文化財調査報告書第27集
11. 仙台市教育委員会 1982「史跡陸奥国分寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第37集
12. 仙台市教育委員会 1983「史跡陸奥国分寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第47集
13. 仙台市教育委員会 1983「砂押古墳」『仙台平野の遺跡群Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第47集
14. 仙台市教育委員会 1984『史跡陸奥国分寺跡 昭和58年度環境整備予備調査概報 南大門跡東脇築地跡』仙台市文化財調査報告書第63集
15. 仙台市教育委員会 1987「史跡陸奥国分寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅵ』仙台市文化財調査報告書第97集
16. 仙台市教育委員会 1988「陸奥国分寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第111集
17. 仙台市教育委員会 1990「陸奥国分寺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅸ』仙台市文化財調査報告書第134集
18. 仙台市教育委員会 2006「陸奥国分寺跡南大門跡、葉師堂仁王門跡の調査」『郡山遺跡26』仙台市文化財調査報告書第296集
19. 仙台市教育委員会 2007「陸奥国分寺跡」『郡山遺跡27』仙台市文化財調査報告書第307集
20. 宮城県教育委員会 1968「陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告」宮城県文化財調査報告書第14集
21. 陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961『陸奥国分寺跡』

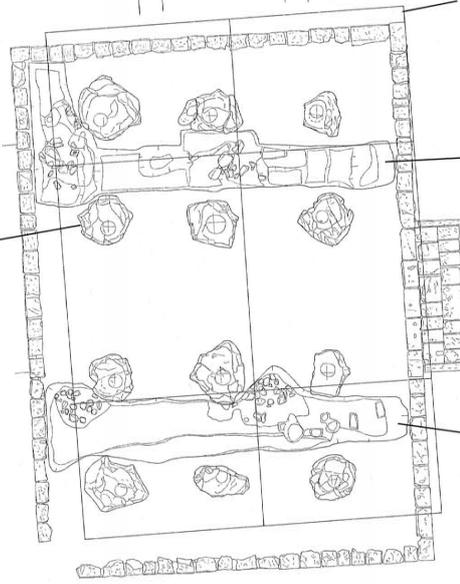
調査指導委員会の開催

- 平成19年度 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 平成19年3月10日 北庁舎B棟1階会議室
- ・平成19年度の調査成果について
 - ・平成20年度の調査計画について

Y=6385m

X=194540m

現存仁王門の礎石



推定南大門跡

26次Aトレンチ

26次Bトレンチ

Y=6395m

南辺築地堀跡 (SF49)

南辺溝跡 (SD50)

4区

Y=6405m

X=194540m



第19次(昭和58年)調査区

X=194555m



Y=6385m

Y=6395m

Y=6405m

第30図 南大門跡、南辺築地堀・溝跡平面図

報 告 書 抄 録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん							
書名	仙台平野の遺跡群 XⅧ							
副書名	平成19年度発掘調査概報 陸奥国分寺跡第28次調査ほか							
巻次	XⅧ							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第328集							
編著者名	平間亮輔、長島榮一、齋藤義彦							
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
陸奥国分寺跡	宮城県仙台市 宮城野区木ノ下三丁目	04100	01019	38° 14′ 55″	140° 54′ 22″	2007・5・8 ～ 2007・8・9	702㎡	重要遺跡の 範囲確認調 査
砂押古墳	宮城県仙台市 太白区砂押町125-10	04100	01206	38° 13′ 26″	140° 52′ 9″	2007・7・9 ～ 2007・8・30	200㎡	重要遺跡の 範囲確認調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
陸奥国分寺跡	寺院跡	奈良～ 平安	築地堀跡、溝跡 掘立柱建物跡、 竪穴住居跡	土師器、須恵器、瓦		伽藍地南辺で築地堀 跡、北部で掘立柱建物 跡と竪穴住居跡を発 見した		
砂押古墳	古墳	古墳	箱式石棺 礫郭	埴輪		箱式石棺と礫郭の2 種類の埋葬施設を確 認した		

仙台市文化財調査報告書第328集
仙台平野の遺跡群 XⅧ
 平成19年度発掘調査概報
 陸奥国分寺跡第28次調査ほか
 2008年3月

発行 仙台市教育委員会
 仙台市青葉区国分町三丁目7-1
 文化財課 TEL 022 (214) 8893
 印刷 株式会社 建設プレス
 仙台市青葉区折立三丁目2-10
 TEL 022 (302) 0177

